

42213

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 80145

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

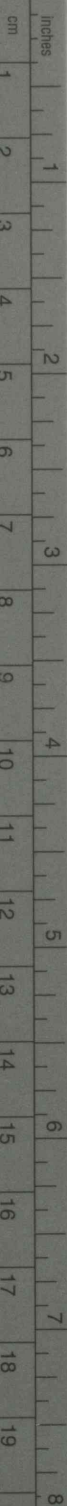


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



4b
810
214

現代女子國語讀本 卷五





日英兩皇太子殿下

46
810
K14

文部省檢定
大正十四年二月七日
高等女子學校國語科用

八波則吉編

現代女子國語讀本

株式會社
東京
成館
發行



現代女子國語讀本 卷五

目次

前編

六巻

- 一 國民の誇……………永田秀次郎……………一
- 二 新緑……………近松秋江……………七
- 三 蹠(詩)……………白鳥省吾……………三
- 四 日誌……………跡見花蹠……………四
- 五 いろくゝの話……………五十嵐力……………三
- 六 鍵と梯子……………三角錫子……………三

目次

七 美術の鑑賞……………川路柳虹…三

八 日光の初夏……………田山花袋…三

九 大佛(詩)……………與謝野寬…四

一〇 母の天職……………福澤諭吉…四

一一 白日の涙……………山田邦子…九

一二 女性の力(詩)……………土井晚翠…六

一三 花物語……………吉村冬彦…六

一 芭蕉の花……………三

二 棟の花……………五

一四 我が故郷……………六

一五 武藏野の富士……………田山花袋…七

一六 祇園精舎……………林久男…七

一七 旅の歌から……………與謝野晶子…七

一八 櫻町陣屋……………横山健堂…一〇

中編

一 仁和寺の法師……………吉田兼好…一〇

一 石清水まうて……………一〇

二 鼎かづき……………一〇

二 博雅の三位……………(今昔物語)…二

三 我が父母……………新井白石…一六

四 狂歌と狂句……………二四

後編

一 皇室中心主義…………… 德富蘇峰…二七

二 國民の歌(詩)…………… 北原白秋…二九

三 清 水…………… 荻原井泉水…二四

四 思出の一節…………… 三角錫子…一六

五 風に吹かれる草(詩)…………… 田尻稻子…一五

六 五重の塔…………… 幸田露伴…二五

七 文學に志した頃…………… 島崎藤村…二六

八 舊友に送る(口語書簡文)…………… 原田琴子…二七

九 砂上漫筆…………… 相馬御風…二七

一〇 道(詩)…………… 大西 祝…二五

現代女子國語讀本 卷五

前編

一 國民の誇

永田秀次郎

永田秀次郎
兵庫縣の人、
明治九年生、
貴族院議員

大正十一年四月、英國皇太子殿下の御來朝を迎へ奉つて、我々は今更のやうに一國民として皇室を奉戴するの歡喜と矜誇を感じたのだつた。世界戦争の前後に於て、支那に革命があり、續いて露のロマノフ家、獨のホーヘンツォルレルン家、Romanoff Hohenzollern 頃のハプスブルグ家等が將棋倒しに傾覆した。當

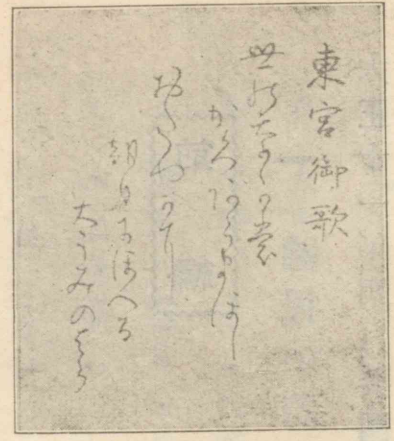
日本ク
皇室は
カ合衆國大統領
領(1856-192
デモクラシー
民主主義
ミリタリズム
軍國主義

ウィルソン
當時のアメリ
カ合衆國大統
領(1856-192
デモクラシー
民主主義
ミリタリズム
軍國主義

東宮御歌
世のなかも
かくあらま
ほしおだや
かに朝日に
ほへる大う
みのはら

阪正臣
愛知縣の人、
安政二年生、
宮内省御歌所
寄人

時米國大統領ウィルソン氏はこの大戦を目して、デモクラシーとミリタリズムの戦争だと大呼したが、その聲は帝政に對する共和政の勝利を叫ぶかのやうに感じられた。然るに、この際に於て、我が國民に百萬の援兵を得たやうな心地を與へたものは、實に英國皇室の存在並にその國民の尊皇心だつた。當時滔々たる世界思潮の暗流の中に處して、大英國民はさながら狂瀾の中に立つてゐる巨巖のやうに、儼乎として動搖



(筆正阪) 歌御宮東

せず、冷然として新思潮を蔑視し、昂然として英國は英國である。」と高唱してゐた。由來英國人は「遲緩ではあるが堅實である。」と稱されてゐる。我々はそこに英人の偉大性を認めて、これを讚美せずにはゐられない。あの邯鄲に歩を學

暗國の
世界下鬼
潮ト
エフ有様

ローズベリ
英國の政治家
伯爵、前内閣
總理大臣(18



王女ヤリトクィヅ

如く、皇室は軍旗の如し。」といつた比喩に、最も深く感動するものである。この一語は極めて雄辯に英國人の自尊心と

び、己が歩を忘れて路傍に匍匐するの徒は深く反省せねばならぬ。我々は英國人の尊皇心に關して、ローズベリーのいはゆる國民は軍隊の

前 一語
後 一語
何れに
例 一語
説明す

ヴィクトリア女王
(1819-1901)
エドワード七世
(1841-1910)

尊皇心の調和を説明してゐる。英國人にこの自信があるために、大戦中の試練を経て、國民と皇室の親和が愈々緊密を加へたのである。我々は我が日本國民の自尊心と尊皇心の調和に對しては、この比喩を以て満足せず、國民は圓周の如く、皇室は中心の如し、と提唱し、以て兩者不可分の關係を説明したい。そして、この兩比喩の間におのづから籠るところの彼我國民性の異同には、實に趣味津津たるものがあると思ふ。

英國は近代に於てヴィクトリア女王エドワード七世、並に現皇帝ジョージ五世陛下を通じ、英明の君主が相次いで君臨され、殊に今回御來朝のプリンス、オヴ、ウェールズ殿下

攝政宮
大正十年十一月二十五日攝政御就任

四百五の
津をさす
趣味
とは如何

が聰慧であらせられるから、英皇室は彌が上にも國民の信望を蒐めてゐられる。その事情は、また我が國の近代に於て、明治大帝から現陛下に及び、殊に攝政宮殿下の御賢明に對して、國民の信賴歸服の洵に絶大であるのに酷似してゐる。我々もまた「日本は日本である」と考へてゐる。尊皇心については、毛頭も英國を羨むべき理由がない。英國人は宜しくその皇室を無上のものと考へてよい。我々はまた我が皇室を無上のものと考へてゐるのである。

さて、我々が最も欣快に感ずることは、日英兩國民は各、その皇室を奉戴する上に於て、互に十分の理解と情熱の上に立つてゐることである。我々には、共和政治を行はねばな

感^レドセ
所^レ
意味^の
深^き所^レ
深^之
愛^の
短^文
古人
服部嵐雲



永田秀次郎

らぬ國民は、皇室に對する理解と情熱を持ち得ない不幸な國民であるとしか思はれない。あの不妊の女を見よ。己が掌中の玉ともいふべき愛兒を持つ歡を理解しないで、僅に雛人形を抱いて自ら慰めてゐるではないか。共和國民は國民のシンボルたる皇帝を戴くの歡喜を理解しない、圓周の中心たる皇室を戴くの悅樂を會得しない。たゞ僅に一定任期のある大統領を選出して、以て自ら慰めてゐるのに過ぎない。古人の句に、石女の雛か

近松秋江
本名徳田浩
司、岡山縣の
人、明治九年
生、文學者

しづくぞあはれなる。」とあるが、我々は共和國が期限付の主權者たる大統領を戴く有様を見て、これ恰も石女の雛に冊くのと同一であると思はれて、一種の憐憫を感じずにはゐられない。是に於てか、我々は英國人とともに、大なる誇を以て共和國民にいつてやりたい、君達は皇室を戴く愛情を味ふことを知らぬ誠に氣の毒な國民である。」と。

二 新 綠

近松 秋江

自然の美に心酔し、自然の恩寵を心から感謝しながら、柔い自然の懐に入つて、甘えたいやうな氣持にさせられるのは新綠の頃である。

（單純感情）
情緒
喜怒哀樂
一時の喜び
ものごと
此の刻の喜び
ものごと
情緒

新緑の頃になると、私は年少の頃から、何故となくたゞ懐かしいといふ感情が胸の底から湧起るのが常である。その懐かしいといふ感情は何を對象として起るのか、明には分らない。満目蕭條たる冬の季節から、天地が生々の氣に蘇つて、自然は豊麗な色彩で飾られる。この四圍の環境の變化は、人間をして自ら生存の幸福を意識し、生命の躍動を感受させる。

新緑の頃になると、人間は戸内よりも野を思ひ、山を慕ひ、草木を親しむやうになる。どこかの青い芝生の上に行つて、仰向けに寝轉んで、思ふ存分に自然の寵兒になつて、人間の生活の苦味を忘れて見たいやうな氣になる。

野にはもう菜の花の黄もすがれて、却つて白い菜の花がいつまでも咲残つてゐる。その花の生れ代りでもあるかのやうな黄や白の蝶々も老いて、臺の伸びた衰殘の花から花へと戯れてゐる。青い麥は穂を抜いて來る。蠶豆や豌豆の莖が成育して、薄紫の花が物憂い五月の太陽に照されてゐる。蓮華草の紅紫色の花は今が盛りで、處によつては、農夫は稻を植ゑるために、それらの野草を掘返して、水田に水を仕掛けてゐる。春雨の降り嵩んだ小溜りの用水は畦の小草を浸して、どぶくと流れてゐる。どこからともなく小蛙の啼く聲が懐かしく聞えて來る。かういふ時、私はたゞ生存してゐることの幸福を意識する。そして、それ

とともに、また靜に暮れて行く晩春の日の永いのに倦み、夕暮の新緑に映る灯の色の懐かしさにも、何故とも知らず、いささか物足りない侘しき、淡い哀愁を唆られることがある。長い冬ぢゆう親しんでゐた座右の火鉢もやゝ不用に近くなり、さうかといつて蚊帳のいぶせさもなく、寢起の身體の自由さ快さがしみじみと味はれる。

春宵千金といふが、花期よりも新緑の頃の方が寧ろ眞に一刻千金の値がある。天は人類に對して冷酷なこともあるが、また惠深いこともある。新緑の頃には、人間は最も天の惠を感謝する氣にならされる。靜かな朝暉に映發してゐる軟い黄緑の色は、何ともいへないほどよい。この頃の

春宵
春宵一刻直千金、花有清香、月有陰、歌管樓臺聲細、鞦韆院落、夜沈沈（蘇軾）

常として、日中にはよく風が起るが、夕方になると、晝間の風は靜まり、遠くの田園の森や家並の空には、蒼茫として一抹の晚霞が棚曳く。そんな夕方には、家の中にじつとしてゐるのも悪くはないが、何となく家に閉籠つてゐるのが惜しいやうな氣がして、近く森や木立の多い郊外の住宅地のまはりなどをぶらぶらと逍遙して見たくなる。たゞそれだけの散歩でも、何ともいへず楽しく、そして氣分を和げさせられる。

さうすると、まだ年少の頃、田舎にゐた時分のこと懐かしく思ひ起される。青い穂を抜いた麥の圃の間の野徑を歩いて行くと、微に柔い植物性の匂がする。四方を願望す

ると、野も山も清々しい新緑を装ひ、遠くの山は淡蒼く霞が
 棚曳いてゐる。野から戻つて來た村の子供が麥の莖を取
 つて、器用にそれを舌の先で口笛にして吹く。
 新緑の頃には、どこへいつても、すべてこの世界が美しく
 楽しいものに思はれる。その新緑も、やがて夏が來、秋が來、
 冬が來て、空しく枯れるものだと知りながらも、そんなこと
 など勿論考へる暇もなく、たゞ眼に見える生々した緑の世
 界が、人間に生存を楽しく思はせる。げに夏の暑さ冬の寒
 さにはつい愚痴を溢しても、新緑に對して愚痴をいふもの
 はなからう。

白鳥省吾
 宮城縣の人、
 明治二十三年
 生、詩人

喉声を
 這て見
 様子を見
 ちの
 距離
 美し
 神の
 古と
 美し
 美し
 美し

自由詩 三 蹠

白鳥省吾

吾が兒はかすかなる
 二本の齒を持ち
 みづから掛聲し楽しく這ひ
 鳩のごとく喉聲に
 言葉なき言葉でおもちやと語り
 あらゆる物のなかに遊ぶ

お、柔く輝く成長よ
 まだ大地を踏まぬその蹠は
 美しき少女の下顎よりもなだらかな圓みを持ち

温く羽二重の艶を持ち
 絶えず踊るごとく楽しく動き
 ほのかなる新月の形して
 何物かを尊く指し示す

おゝ人々よ
 この躑の
 かゝる美しき柔かさを
 いま君の身體の何處に見出でるか

四 日誌 (抄録)

跡見花蹊

跡見花蹊
 名は瀧野、大
 阪府の人、天
 保十一年生、
 女流教育家

明治二十七年
 四月九日。門下生のために揮毫したる習字手本の數一
 萬帖に達したれば、祝賀會を開く。

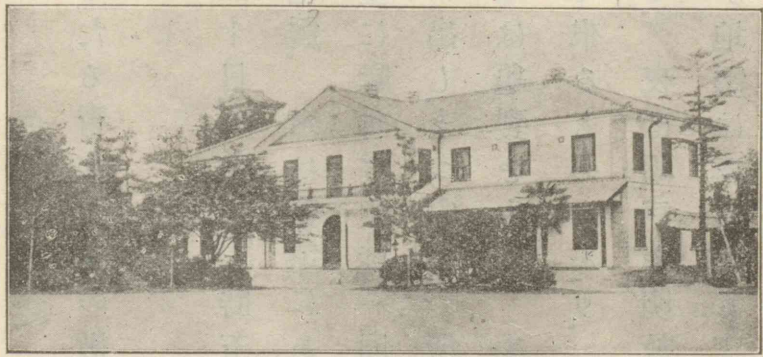


跡見花蹊

六月二十日。午下二時五分、
 轟然大地震。余は畫室にあり。
 直ちに塾に駈付け、生徒一同を
 運動場に出し、まづ安心。所々
 壁墜ち、地は龜裂を生ず。生徒
 の宅よりも人々駈來る。或は馬にて來るものもあり。何
 れもその子女の恙なきを喜びて歸る。夜は雨戸を明放し、
 表口には人々徹夜の番をなす。幸ひ地震は再び來らずし

て、夜明けたり。
七月二十八日。朝鮮事件號外來
る。支那、日本に對して宣戰布告を
なしたるよし。いよく砲火開か
る。

九月十三日。大元帥陛下東京御
發輦、大本營を廣島に移さる。征清
の將卒勇氣百倍、大鳳輦御西進、陛下
萬々歳。日清開戦の日より、余は朝
食を廢して二食とし、早朝附近の神
社に詣でて戰勝を祈願す。衣服等



營 本 大 島 廣 舊

は一切拵へぬことにしたり。日々大勝利の號外のみ、嬉し
とも嬉し。

陸も海も勝つことのみの音づれに

秋のあはれもおぼえざりけり

明治二十八年。

一月十八日。夜十時五十四分、俄然激震。余、闈より飛起
きて、生徒を廣庭に出す。皆々無事、まづく安心。

四月三十日。大元帥陛下龍顏麗しく廣島より還幸あら
せらる。余は北白川宮邸に參じて、御洋館樓上より御凱旋
の盛觀を拜す。拜觀者實に幾萬といふことを知らず。

明治二十九年。

六月十五日。宮城岩手青森三縣に大海嘯あり。流失家屋三萬を下らずといふ。悲惨極まる。生徒中より金圓を義捐することとなせり。



小松宮彰仁親王

八月一日。小松宮兩殿下の

御伴仰付けられ、三島御別邸に參る。この御殿は殿下の數寄を凝らせられたる御建築にて、日々此處彼處の御室にて御茶

事あり。見渡す絶景を寫生して楽しむ。

八月九日。小松宮兩殿下の御伴にて、江の島なる有馬伯の別莊に參り、岩窟その他を見物し、また海人に命じて種々

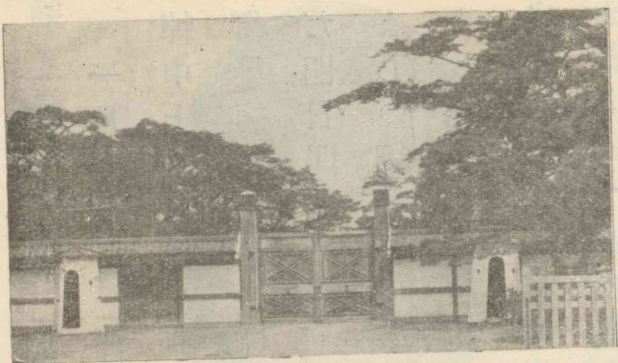
有馬伯
小松宮妃殿下
御里方

小松宮
彰仁親王
三島
靜岡縣三島町

の魚貝を捕らす。この日、日蝕あり。

十一月十八日。内親王富美宮殿

下、泰宮殿下禁苑の菊花御覽あらせらる。につき、御伴仰付けられて參る。僊錦閣に御休憩遊ばされ、余李子その他拜謁仰付けらる。御苑内所々拜觀す。種々の菊花いと麗し。山紅葉また殊更にて、洗心亭の前などにては、御池に映りて筆も及ばぬさまなり。こゝかしこ御逍遙あら



青山御所

せられて後還啓せさせらる。

富美宮
明治天皇第八
皇女、尤子内
親王、今、朝香
宮鳩彦王妃
泰宮
明治天皇第九
皇女、聰子内
親王、今、東久
邇宮稔彦王妃
李子
花露の養女、
伯爵萬里小路
通房の女

皇太后陛下
英照皇太后、
御名は夙子、
九條尙忠の第
六女、孝明天
皇の皇后、明
治三十年崩
御、御年六十

九條籌子
九條道孝の二
女、大谷光瑞
の妻

明治三十年。

一月十二日。皇太后陛下崩御發喪あらせらる。
一月十六日。青山御所に參る。濱荻典侍御局にて御哀
悼申上ぐ。種々御不例中のことども伺ひ奉る。この八日
御發病にて、十一日午後六時雲隠れさせ給へるよし。た
だ四日間にてかゝるさまにならせ給ふとは、いかなる御痛
ましの御事にや。御臨終の際も御確かにて、京都西本願寺
より馳參られたる九條籌子様と御話の上、そのまゝ崩御あ
らせられたる御様子に伺ひ奉る。
さらでだに涙のかゝる袖の上に
雪と雨との降りそゞぐ夜や

愛四郎
明治四十年
歿、年五十八
千久子
遠藤氏、この
時年三十八

櫻村博士
醫學博士櫻村
清徳



英照皇太后

一月二十日。弟愛四郎妻千久子、朝八時より手にしびれ
を覺え、をかきしきことなりとて、便所に行きたるに、足許たゞ
ならず。女中二人して室に連歸り、床を敷きて寝かせたる
に、一言も發せず。醫者も直ち
に來り、櫻村博士も來診ありた
れど、腦出血にて回復覺束なし
といふ。手の限り盡したれど
致方なし。

六月二十七日。李子とともに青山御所に參る。御馴染
深き皇太后陛下の典侍内侍の方々數名、このたび西京へ御
隱居仰付けられたるにつき、御暇申上ぐ。白菊の内侍御案

内にて、禁苑を拜觀す。夏木立青葉の眺一入にて、池の汀の
あやめも咲出でたれど、なんとなく愁を帶べる心地す。あ
やめはぎなど折りて賜はる。

咲けよくみはしの下の菖蒲草

君あまがけり見そなはずらん (花の下みち)

五十嵐力
米澤市の人、
明治七年生、
文章家、文學
博士、早稻田
大學教授

五 いろいろの話

五十嵐 力

逢つてから別れるまで、自分の専門の話ばかりして聞か
せる人がある。私はさういふ人が好きだ。「いや、その後は、」
といつてから、「さやうなら。」といふまで、自分の専門はおくび

にも出さずに、滔々と世間話をして聞かせる人がある。私
はさういふ人がなほ好きだ。

二

嘗て食道樂家の筍通の話聞いたことがある。筍の一
番甘しいのは、竹林に行つて、鍋を掛けて、筍の嫩いのを掘る
剝く、すぐに鍋に入れて料理つたのだといふ。更に甘しい
のは、地から生えたたまゝの嫩い筍の中を抉つて、その中に抉
り取つた實を、卵椎茸・雞肉などと一緒にして刻んだのを入
れて、上を蔽つて蒸焼にしたのだといふ。
學問もさうだらう。文字の間から捜し出した水氣のな
い知識は、店ざらしの筍であらう。

ま物たきり
この字は
つまらぬ

「二筆啓上ツカマツリソロ。」
この歌から、彼女は文士鳥とも呼ばれてゐる。

六 鍵と梯子

三角錫子



三角錫子

目まぐるしい世界の進歩は、私達に暫しの寛ぎをも與へてくれない。それにも係らず、私達は絶えず自分自身を育んで行かねばならないのである。じつと外を眺めると、長い間待ちに待つた花が咲いたかと思ふ間もなく散つてしまつて、みづくしい若葉の一つ一

三角錫子
金澤市の人、
常磐松女學校
長、大正十年
歿、年五十

つに日が照輝いて、梢一杯に生々の氣が充ちあふれてゐる。快い微風がその間を渡つて、喜びの囁きを傳へて來る。我を忘れて暫しは自然と同じ歡樂に浸つては見るもの、なんだか自分一人が取殘されてゐるやうな心地になる。自分の一番懐かしい、自分に一番同情のある、そして自分とも親しいと思つてゐる自然までが、自分を置去りにしてしまふやうな淋しさと惱ましさを覺えずにはゐられない。こんな中にゐて、私達は何を考へ何を爲さねばならないだらうか。考へたいと思ふこと、したいと思ふことが、あまりに澤山過ぎはしなからうか。澤山過ぎるといふことが、やがて何事もしないことに歸着してしまふといふ變な日常

の經驗を、私達は度々反復してゐる。私達はまづ第一に學ばねばならない、知識を收得せねばならない。知識は心の眼である。眼なしにどうして人生の行路を踏違へずに行くことが出来よう。私達はどうしても私達の胸にある心の眼を見開いて、自分の行くべき道を的確に見出さねばならない。かう思ふ時、まづ心に浮ぶのは自分の知識の不足である。

こんな貧弱な知識では仕方がないと思ふ。規則正しい學校教育が、正確な知識を與へてくれることはいふまでもないが、しかし、それだけが決して知識收得の唯一の方法ではない。學校教育は單に私達に或鍵と或梯子を與へてく

れるのに過ぎない。嚴重に藏の中に收められてある知識、手も届かない摩天樓の頂上に藏められてある神祕、此等は皆この鍵や梯子を以て自分で取りに行かねば、決して我が物となりはしない。

最初に與へられた鍵は實に小さいが、それを用ひさへすれば、次から次へと所要の鍵を見出して、世界のどの寶庫へでも自由に出入することが出来る。最初に貰つた梯子はたとひ三段しかない低いものでも、それを用ひてまづ三段昇り、次にまた三段昇り、遂には幾百階の雲の上にも入ることが出来る。最初の小さい鍵、低い梯子を用ひることを忘れて、徒に藏の錠の外れないことや、仰ぎ見る天の高いこと

を歎いたり、若しくは眼に見えるから太陽は近い處にあると思ふやうな誤に陥つてはならない。私達は數年毎に修正される小學校の教科書を見ても、必ず何等か得るところがある。足許に落散つてゐる一葉の引札にも、今まで知らない知識の秘められてゐることを忘れてはならない。こんな低級な雜誌と侮つてゐるものの中にさへ、どれだけよい經驗が教へられてゐるか知れない。日々手にする新聞紙、それを通讀——敢て熟讀とはいはない——したなら、どれだけの活きた知識が得られるか測り知れない。新刊の有益な書籍をその折々に讀んだり、所々に開かれる講演を聴いたりすることは、私達の眼をだんだ

川路柳虹
名は誠、東京
市の人、明治
二十一年生、
詩人

んに開いて行く最良の方法である。今日婦人社會の先達をしてゐられる婦人の總べては、必ずしも最高の學校教育を受けた人ばかりではない。古來の婦人を見ても、またその通りである。たゞ求めて已まない努力さへあれば、知識は自分を中心として集つて來るものである。(婦人生活の創造)

七 美術の鑑賞

總べて美術といふものは、何に限らず、味ふことによつて價值が出て來るものです。どんな作品にせよ、美術家が精神を籠めて作つたものである以上、之を觀る人は、其の苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然に出來

るものでない以上、其の作品はどういふ風にして出来たかを考へ、そして、之を觀て自分はどうか感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味ふことです。此の「味ふ」ことを鑑賞と申します。畢竟、繪でも彫刻でも、之を作つた人は、自然に就いて感じたことをそれに表したのですから、其の表したものは、即ち作者自身の考や物の見方の態度を示したものであるといへます。それ故、一の美術品を味ふことは、單に作品を味ふことでなく、其の作品を作つた作家の精神を味ふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人の畫いたものと、乙の人の畫いたものとは、色も形も總べて相違してゐます。それは何故かといふに、作者がそれ／＼自分自

天性
個性
眞

平盛の太陽
の光が
萬福と
（ふ）を
を相互の

身の個性によつて、同じ色でも、甲は之を強く表し、乙は非常に弱い調子で表すといふ風に、其の作者の心持や感じが異なるからで、其の異なる所に個性の差が生ずるのです。美術上の作品は作者の異なる個性を表すから面白いのです。美術家は一般の人が何の注意も拂はない所に非常な注意を拂ひ、人の氣付かない所に美を發見します。一般の人でも、夕日の美しさは漠然と知つてはゐませう。併し、其の夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。併し、美術家は自然のさういふ微細な點にまでも常に注意してゐますから、其處から、人の常に看過して居るものに對して、非常

中に身入、
自然科學
精神科學

に美しいものを發見して來るのです。ですから、繪や彫刻
を見るといふことは、一面には、さういふ自然に對して我々
の看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふこ
とになります。美術品を味ふことは、其の味ふことによつ
て、常には何でもなく見えてゐた自然が、かうも美しいもの
であるかといふことを本當に知る所にあります。此の
私は能く、私には美術は解らない。とか、何處が善いのか悪
いのか見當が付かない。とかいふことを聞きます。此の解
るといふことは、無論その作品を理解することを意味しま
すが、併し、美術品を理解するには、科學などを理解するやう
に、たゞ理窟にだけ依つてはいけません。勿論理智も必要

感情で
價値す

感情に與
ないかをい

感力

ではありますが、美術品は理窟によつて解する以外に、感じ
ることが必要です。それ故、美術の鑑賞には、どういふ風に
理解したか。といふことよりも、どういふ風に感じたか。とい
ふことが肝腎です。何となれば、美術品はやはり人の感情
に訴へるもので、何よりも人を感動させるものですから、之
を觀て何等の感じも起らないといふなら、それは其の作品
が美術品としての資格を備へてゐないか、或は之を觀る人
が感情に乏しいかに因るのです。こゝに感情といふのは、
悲しいとか嬉しいとかいふことを意味する感情ではなく、
むつかしく言へば感性といふべきもの、即ち感じる心のあ
ることをいふのです。感性がなければ、本當に美術品を鑑

賞することは出来ません。結局、美術を味ふといふことは、自分の氣持を以て其の作品を観ることです。それでは、如何にすればさういふ風に自分の感情で美術品を理解することが出来るかといふに、それには、先づ虚心平氣で作品を観ること、何度もく、之を熟視すること、其の技巧を知ること、此等の條件が必要です。作品を味ふ爲には、徒に他人の噂や評判などに動かされないで、自分でそれを好むかといふことを考へるべきです。其の爲には、先づ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、それを何度もく、熟視して居ることです。其の内に色々のことゝが解つて來ます。さて、そこから一般の技巧即ち作

形式、形、人の目、内容



僧正遍照 (土佐光成筆)

品の技術を見るのです。巧うまいであるとか拙へたいかいふことは、要するに比較ですから、澤山の作品を見た上でなければ解りません。澤山の作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次には其の作品がどういふ風にして出来て居るかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の常識一歩の程か、他はさういふを學ばなければ出来ませんが、それは急に一時に知る譯には行きません。樂譜に關する根本の常識に缺けてゐては、折角音樂を聴いても解らぬやうに、能く美術品を理解するには、矢張一通り技術に關する常識を有する必要が有ります。油繪油の絵と水彩畫との差、繪具の名前それから調子トーンとか色カラーとか筆觸タッチとか様式スタイルとかいふやうなこ

田山花袋

名は録彌、群馬縣の人、明治四年生、小説家

芭蕉

松尾宗房、伊賀國の人、俳人、元祿七年(三五四)歿、年五十一

困こ救きう芭蕉ばきう鬼おに想さう

とも、其の意味ぐらゐれば心得てゐなければなりません。

八 日光の初夏

田山花袋

新緑の美しさ。それは芭蕉の「あらたふと青葉若葉の日の光」を思ひ出させずには置かないやうな美しさであつた。あらゆる萌出づる力自然の力に伴はれて、次第に塗られて來る様々の色彩、それが山を蔽ひ、谷を蔽ひ、朱塗の典雅な橋を蔽ひ、更にきら／＼と溪の瀬に碎ける日影と相掩映して、暗い杉の森の中に半ば埋められたやうになつてゐる、あの金碧の殿堂も、その頃には晴れやかにその姿を現したやうな氣がした。外山の半腹あたりから望むと、その杉の古樹と新緑と

相雜り合つた間に、殿堂は、或はその屋尖を、或はその樓閣を、或はその五重の塔を、或はその廻廊を、さながら大和繪日本繪か何ぞのやうに展開して見せた。單に繪だとか何とかいつてしまふことの出來ないやうな美しさがそこにあつた。私はよく一人でその金碧の殿堂を繞つた苔の深い石垣に沿つた路を歩いたが、をり／＼は、崖になつた處に卯の花などが眞白に咲いてゐて、それがちら／＼とそこを流れる細い綺麗な溪水の上に落ちた。

六月の祭禮は殊に私の心を惹いた。祖先の昔からそれと定められた神領の百姓連は、今もその日は朝早くからやつて來て、三神庫の中に藏められた鎧兜、槍刀などに身を

ため、或は鎧武者となり、或は槍持となり、或は太刀持となり、古い昔のまゝの列を作つて、東照宮の一の門前から長坂の旅所へと、神輿に扈從しつゝ、進んだ。後章少くとも、私は、そこに、日本にもさう澤山には見ることの出来ない古風な祭禮の儀式を發見した。

その旅所の廣庭、それは全く人氣なく暗く鎖されてあるのであつたが、その日ばかりは晴れやかに、さながら遠い昔の或一日が俄に再びそこに蘇つて來たやうに、今の世とは全く違つた色彩と氣分とをあたりに漂はさせた。白い裾の長い衣服、冠の高く欹つた人達の姿、笙の音の靜かな調子、もしそこにそれを見物する群衆の中に、眞紅の洋傘を翳し

た肥つた外國婦人が雜つてゐなかつたなら、私達の心は遠く千年の昔の世に夢のやうに誘はれて行つてしまつたに相違ない。(山水處々)

九大佛

（新体詩）

與謝野 寛

「大佛さまを拜ませてくださんせや」と 田舎者

老人づれの一列は 竹矢來して「御普請」と

高札たてた札の口 羊のやうに肩を摩る

白衣ばかりを着流して眼鏡かけたる奈良法師
牧場の番の板小屋とよう似た中に机据ゑる

與謝野寛
號は鐵幹、京都市の人、明治六年生、歌人、慶應義塾大學教授

臥坐者
特徴

笑みて見おろし聲かける 「拜觀料は五錢だよ」



佛大の良奈

札を貰うてつ
づき入る高き
二重の不思議
なる
御堂の中は真
暗黒くらがら 「拜まれ

「ません」見えねえや」

「あれはお鼻か」「いやお肩」暗いことかな、なあまいだあ」

また後から進み入る中學生の一隊は
泥靴鳴しわめき喚ぶ 「馬鹿に暗いや」「いやすこし見
える」なんぢやな」大佛の顔を包んだ板ばかり」

蓮座の下に背廣着て高帽かぶる二三人
教師らしいが語り合ふ 「うむ、奇怪な構造ぢや」
「擣牛うつきうしもいふちよつた いつそ露佛あらしがらにしたらどうぢ
やろか」

我はこの時丑寅の太き柱に凭りかゝり
四隅を見上げかう思ふ 「古い御堂は荒れそめて

擣牛
高山林次郎、
山形縣の人、
文學博士、明
治三十五年
歿、年三十二

幾世を経たか、その世々の大徳たちはこを歎き

棟は破れて雨漏るを板もて覆ひ、かたぶくを

長き柱に受支へ、はては暗きを救はうと

あらぬ方にも方便の明り取るべき窓あけた

「時」が杖うつ金剛杖の力おそろしさばかりに

大徳たちが幾世々の心鬼しらひも、新しき

今の人には何になる、古き匂の木は朽ちた

げにこの時ぞ、一切の古い御堂をとりはらひ

遠世より
國の
親
遠井

蒼空のもと、遠世よりようは拜まぬ光顔の
巍々とまします本佛を國の四方に見すべけれ

なぜまたこの日おろかにもつくるひ普請人嘆ふ

この見ぐるしき古堂を遺遺とするか法師等は
佛を見ずに堂を見る、否、堂を見ず錢を見る

堂の中には入替り人來る、冥土冥土ゆく

天迷ふ亡者の呻呻き聲、拜拜まれません「見えねえや」

「あれはお鼻か」「いやお肩」「暗いことかな、なあまいだあ」

福澤諭吉
大分縣の人、
明治の先覺
者、明治三十
四年歿、年六
十八

一〇 母の天職

福澤諭吉

子供の養育は母の天職なれば、たとひ富貴の身分にても、天然の約束に従ひ自ら乳を授けて養ふべし。或は自身の



福 雇ふことありとも、決して朝夕
諭 の注意を怠るべからず。既に
吉 哺乳の時期を過ぐとも、子供の
飲食・衣服に心を用ひて、些細の
ことまで見逃しにせざるは、即

ちその天職を奉ずる所以なり。飲食・衣服は有形物にして、誰の手を以て與ふるも同様な

獨立自尊



福澤諭吉筆蹟

るに似たれども、實は然らず。母の自らこれを與ふる無形の感化力は、有形物に優ること百千倍なるを忘るべからず。蠶を養ふにも、家人自らすると、雇人に打任するとは、その生育に相違ありといふ。況や自分の産みたる子供に於ては、人任せの不可なること、いはずして明白なるべし。世間の婦人或はこの道理を知らず、多くの子供を持ちながら、その着物の縫ひを縫ふは面倒なり、その食事の世話は煩はしとして、これを下女の手に託し、自分は友達との

交際、または物見遊山などにのみ出でて、悠々閑々たるものあるこそ遺憾なれ。
 婦人の遊樂決して咎むべからず。鬱散養生とあれば、花見るもよし、湯治するもよし、或は集會宴會の交際も自ら利益するところあれば宜しけれども、その外出するや、子供は家に残され、生兒は牛乳に養はるといふは、恰も雇人に任せたる蠶の如く、その生育如何はいふを俟たずして明かなるべし。昔、大名高家の子供に心身薄弱のもの多かりしも、貴婦人が子供を育つる法を忘れたるが故なり。我等は婦人の外出を妨げてこれを止むるにあらず、むしろこれを勧めてその活潑ならんことを冀ふものなれども、子供養育の天

職を忘れて、浮かれ浮かるゝが如きは決してこれを許さず。この點については、西洋流の交際法にも感服せざるところ甚だ多し。

一一 白日の涙 (山田邦子)

山田邦子
 本名今井邦枝、代議士今井健彦の妻、長野縣の人、明治二十三年生、歌人

門の戸ががちりと開いて、人の這入つて来る氣配がした。暑い、日の午後三時頃である。机に倚つたまゝ、あまりの暑さに、書かうとするものを纏める氣力もなく、心ばかり苛立ちながら、白日の夢を見るやうな斷片的な様々の現象が、頭の中に浮んでは消え、浮んでは消えするとりとめのな

い境地から引戻された。この暑い日盛りに、誰が來たのだらう。私は好奇心の雜つた人懐かしい氣持で、玄關から人の音なふ聲を待った。と、庭の中戸があいて、細長い竿の先

がまづ頭を現し、それがずん／＼無遠慮に庭に入つて來る。

田 「なんだ、坊やなのか。」

邦 私の顔には思はず軽い微笑が浮んだ。今年六つになる男の子が、

白チョッキに淺黄のズボン、帽子をめんどくさく頭に載せたといふ形で、長い蜻蛉竿を小脇に挟んで、燃立ちさうな赭い顔をしながら入つて來るので



チョッキ
英語 Jacket
の訛

ある。右手には鹽辛蜻蛉を一つ攪まへてゐる。

いつもの六疊の居間に机を据ゑて、それに倚つてゐる母親を、その子は一寸見ただけで、その前をずん／＼通つて、自分のおもちや箱のおいてある部屋に行つて、がたく／＼何か引つくりかへしてゐる。

「坊やは何を捜すの？　そして、この暑いのに、日向を出歩いてゐると病氣になりますよ。」

「うん、蜻蛉だい。蜻蛉を入れておく箱がほしいな。母ちゃん箱頂戴。」

子供はひよつくり間の襖から顔を出した。まだ竿を抱へて蜻蛉を持つてゐる。

「いやな人。竿を家の中まで持込むなんてありますか。蜻蛉は縛つてあげるから、持つていらつしやい。」
子供は慌てて外に竿を投出して、蜻蛉を持つて母の側へ寄つて来た。

「しつかり掴まへておいで、さあ。」

私は白い絲を輪にして、蜻蛉の動かしどほしの足を狙つて絲をからげた。子供は息をころして、その白い絲と、黒いむじやむじやとした毛のある細い六本の足——その一本を一つだけ結へられて、今こまむすびにされようとする蜻蛉は、よくはのみこめぬが、何か自分によくないことが足のところで起つてゐるのを感じ知つて、無意識に、しかし烈しく

反抗する。

「さあ、結べました、手を離してごらん。ほら、ほら、飛ぶでせう、ね。」

子供も私も一緒に聲を出して笑つた。子供は満足さうに、また得意さうにそれを持つて、再び竿を抱へると飛んで出てしまつた。——日蔭でお遊び。といふ母の言葉は、蜻蛉竿の前には、殆ど蛇の唸りよりも値のないもののやうに。
家の中は再び前の暑い沈黙に返つた。が、私は机に倚つて、今度は明るい心に生々とした思が湧上つて来るのを覺えた。

子供にあの竿を買つてやつた日、家の綾野さん——働きながら勉強してゐる婦人——が、坊ちゃんがああ長い竊竿を振廻して、この小路を出ていらつしやると、通る人がみんな笑ひながらよけて行きますの。」

といつたので、私達は聲を揚げて笑つた。その時のことが、再び私を優しい笑ひこんで行つた。それからだんく深く、遂に十方感謝の世界へまで到達した。

私は嘗て、私の親戚のTさんといふ文學士から、悲しい昔話を聞いて涙を流したことがあつた。その人の生みのお

母さんは、故あつて七つの年に實家へ歸つてしまつたのだつた。さうなるまでには、二年も三年も前から悲しい空気がその家を圍繞してゐたといふ。Tさんはお正月に友達と凧を揚げて遊んでゐながら、ふとお母さんが自分の留守に實家へ歸つてしまひはせぬかと思はれて來ると、忽ち凧をたゝんでしまつて、自分の家へ足音を忍んで歸つて來る。そして、胸を轟かせながら、お母さんの居間の障子の穴から内をそつと覗いて見ると、お母さんが寂しさうに針仕事をしてゐる姿が目にはいる。そこでほつと安心して、また足音を忍んで外へ遊びに出かけたといふことである。そして、縣道へ通ずる畑の道より外では遊ばなかつた。それは、

お母さんが實家へ歸るなら、必ずその道を通つて、その縣道へ出るはずなので、そこに遊んでゐればお母さんを引止めることが出来ると思つたのであつたと話された。そのことを思ひ合せて見ると、今歸つて來た自分の子供は、なんと大膽に無遠慮に安心しきつて、母がそこにゐることさへも感じるか感じないかの空しい心で、私の前を通り過ぎたことか、そして、自分の遊戯に耽りきつてゐることか、それはほんたうに當然のことであるが、しかし、子供としての限りない恵みなのである。

母の信
喜志子

喜志子
若山牧水の妻、長野縣の人、明治二十一年生、歌人

の食事、さういふ中に數へられるべき、求めぬ先にたゞ與へられる限りない自然の恵みなのである。子等ゆ見なば我は光か尊くもかしこきことぞいと
し子たちよ(喜志子)

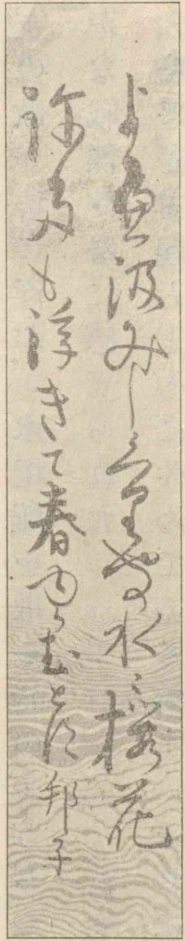
友の歌が心に浮ぶ。水垢離を取る時のやうな、つゝまじやかな戦慄が身に感じられた。

嗚呼、子と親とともに住んでゐる家！それは當然過ぎるほどの當然であつて、しかも思へば自然の深い恵みである。空しいにも似たその日常、そこにおのづからな深いえにしに絶たれぬ豊かな恵みがある。親によつて子は生き、子によつて親も生きる。その拔差しならぬ碁盤の線の、母

といふ目の上にきちんと置かれた自分の位置。たゞそこ
にじつとしてゐるのが、既に事業よりも重いく、役目をし
てゐるのである。

このことに目覺めさせられたのは、なんといふ驚きであ

よべ汲みし
くりやの水
に櫻花許だ
も浮きて春
ゆかむとす
邦子



蹟筆子邦田山

つたら
う。そ
れは血

と肉と涙で得た一つの悟りといつてもいゝほどの世界で
あつた。それは、見たところ、決して華やかなものでも、莊嚴
なものでも、ゆゝしいものでもない。まことにあつけなく、
見過せば見過しにされさうな、日頃は有るか無いかさへも

心に浮ばない日常の連鎖、水の低きに流れるやうな自然の
歩みなのである。

母が母としてそこにあること、そこを守つて守りぬくこ
と、その目的は安逸を貪るためでない、苦しい涙と自己犠牲
と、時には身の震ふほどの悲みにも耐へ、人によつては屈辱
にさへも耐へて、この空しきにも似た日常を續けて行くと
ころに、人間の頭脳では判断することの出来ないほど尊い
仕事果されて行く。その果されて行くものの中に、自分
の眞生命も含まれてゐるのである。そこに十方感謝があ
る。生かされあふ深い世界があるのである。
どうかすると火のやうに燃上る心、自ら切つて出ようと

性善は、す
に付、理、智、情、
判断、
の、
なり

焦る心、それは大方眞實の世界を却つて遠ざける。このデ
リケートな交叉にまで身を置いて、始めて大自然の生かす
道がどんなに微妙で、豊かで、洋々として迫らず、しかも徹底
したものであるかに驚き服するのである。
私の心はまたしてもそこに返つていつた。何事も耐へ
忍んで、水の流れるやうに行かせるがよい、自然の世界に歩
ませるがよい、その道に於てだけは飛躍さへもさせるがよ
い、やう／＼にして胸に落ちて來たこの世界を一步々踏
みしめながら、深い感謝に居らせるがよい。
私はいつか合掌してゐる。靜かな涙が白日の光の中に
點々とこぼれ落ちる。

朝さむるすなはち側に吾子はをりこの世の常のさ
きはひを思ふ

一一一 女性の力

土井晚翠

つちの
土井晚翠
名は林吉、仙
臺市の人、明
治四年生、英
文學者、第二
高等學校教授

操は嚴冬雪ふるなかに
ほろ／＼とむす梅にほひわたる
ほまれは千尋暗なる谷に
潜める幽蘭かをりに似るか
いさをは蒼溟波捲く浪に
輝く白玉ひかりとつづれ
あ、君見えざる無上のいさを

女性の^{高知}高知(高知)のほまれ
あゝ君聞えぬ至高のほまれ

あゝ君知れざる究竟の操
大國民
大なる国民君よりおこる

涙になさけに操に愛に

あゝ君やさしき女性の力

(東海遊子吟)

吉村冬彦

本名寺田寅彦、高知縣の人、明治十一年生、理學博士、東京帝國大學教授

一三 花物語

(客从吟)

見下まゝ(冬彦)

吉村冬彦

一 芭蕉の花

晴上つて急に暑くなつた。朝から手紙を一通書いたばかりで、何をする元氣もない。何遍も机の前へ坐つて見ることが、ぢきに苦しくなつて、つい寢そへつてしまふ。時々涼し

い風が来て、軒のガラスの風鈴が鳴る。床の前には、幌蚊帳

Class

の中に、俊坊が顔を眞赤にして、枕を脱して俯きに寢て居る。縁側へ出て見ると、庭はもう半分蔭になつて、蔭と日向の境を、蟻がうろく／＼して出入して居る。此の間、上田の家から

貫つて来たダリヤは、どうしたものか、少し芽を出しかけた

Dahlia

儘で、大きくならぬ。戸袋の前に大きな廣葉を伸した芭蕉の中の一株には、今年花が咲いた。大きな厚い花瓣が三つ四つ開いたばかりで、到頭開き切らずに朽ちて了ふのかも、う少し萎びかゝつたやうである。蟻が二三匹たかつて居る。俊坊が急に泣出したから、覗いて見ると、蚊帳の中に坐つて、手足を投出して泣いて居る。勝手から妻が急いで來

人向に先れて
人向らう
生事きり
死んか
あ

る。坊は牛乳の饅を、投出した膝の上で、自分に抱へて、乳首から息もつかずごく／＼飲む。涙でくしやく／＼になつた眼で、兩親の顔を等分に眺めながら飲んで居る。飲んで了ふと、又思ひ出したやうに泣出す。まだ眼が覺めきらぬと見える。妻は俊坊を負ぶつて縁側に立つ。「芭蕉の花、坊や芭蕉の花が咲きましたよ。それ、大きな花でせう。實が生りますよ。あの實は食べられないか知ら。」坊は泣止んで、芭蕉の花を指して、「も、く」といふ。「芭蕉は花が咲くと、それきり枯れて了ふつて、お父ちやま本當？」「さうよ、だが人間は花が咲かないでも死んで了ふね。」といつたら、妻は「まあ」といつたきり、背を揺ぶつて居る。坊が眞似をして、「まあ」と

いふ。二人で笑つたら、坊も一緒に笑つた。そして、また芭蕉の花を指して、「も、く」といつた。

二 棟の花

一夏、腦が悪くて、田舎の親類の厄介になつて、一月ぐらゐ遊んでゐた。門前には清い小川が音を立てて流れて居る。狭い村道の向側は一面の青田で、向ふには徳川時代以前の小さい城址の岡が見える。古風な屋根門のすぐ脇に、大きな棟の木が茂つた枝を擴げて、日盛りの道に涼しい蔭を作つてゐる。通りがかりの行商人などが、よく門前で荷を下し、その流で顔を洗うた濡手拭を口に啣へて涼んで居ることがある。一日、暑い盛りに門へ出たら、樹蔭で桶屋が釣

瓶や桶の箍かぎを拵たがめてゐた。綺麗に掃いた道に、青竹の削り屑や鉋屑が散らばつて、棟の花がこぼれて居る。桶屋は黒い痘痕のある一癖ありさうな男である。手拭地の肌着から黒い胸毛を現して、逞しい腕に木槌を振うて居る。槌の音が向ふの岡に反響して、靜かな村里に響き渡る。稻田には強烈な日光が眩しいやうに射して、田圃は暑さに眠つて居るやうに見える。其處へ羅宇屋が一人來て、桶屋の側へ荷を下す。古い、そして小さ過ぎて胸の合はない小倉の洋服に、腰から下は股引脚絆で、素足に草鞋を穿いて居る。古い冬の中折を眉深に冠つて居るが頭は綺麗に剃つた坊主らしい。「今日も松魚が捕れたのう。」と、羅宇屋が話し掛ける。

桶屋は、捕れたかい、此の頃はなんぼ捕れても、みんな蒸氣で上へ積出すから、こちらの口へははいらんわい。」と、やけに桶をぼん／＼と叩く。門の屋根裏に巢をして居る燕が、田圃から歸つて來て又出て行くのを、羅宇屋は煙管を啣へて感心したやうに眺めてゐたが、鳥でも燕ぐらゐる感心な鳥は先づないね。」と前置して、こんな話を始めた。「村の或舊家に燕が昔から巢をくうてゐたが、一日、家の主人が燕に向つて「お前は永年うちで宿を借して居るが、時偶には土産の一つも持つて來たらどうだ。」と戯にいつたことがあつた。そして翌年燕が歸つて來た時、丁度主人が飯を食つてゐた膳の上へ飛んで來て、小さな木の實を一粒落した。主人は何の

氣なしにそれを庭へ投り出したら、間もなく其處から奇妙な樹が生えた。誰も見たこともなければ聞いたこともない不思議な木であつた。其の木が成長すると、枝も葉も一面に氣味の悪い毛蟲がついて、見るも淺ましいやうであつたので、主人は此の木を引抜いて、風呂の焚附に切つて了うた。其の時、丁度町の醫者が通りかゝつて、「それは惜しいことをした。」と歎息する。「どうしてか。」と聞いて見ると、それは我が國では得難い麝香といふものであつたさうな。此處まで一人で饒舌つて了つて、尤もらしい顔をして、煙を輪に吹く。ぼん／＼と桶を叩きながら黙つて聞いてゐた桶屋は、此の時一寸自分の方を見て變な眼付をしたが、そして、そ

の麝香といふのは其の樹のことかい、それとも又毛蟲かい。」と聞く。「うゝん、そりやあ其の麝香にも亦色々種類があるさうでう。」と、どちらとも分らぬことをいふ。桶屋は強ひて聞返さうともせぬ。桶を叩く音は向ふの岡に反響して、棟の花がほろ／＼こぼれる。(藪柑子集)

一四 我が故郷

遠近の山々の雪が解け初めて、そろ／＼田畑に働く農夫の姿が見えるやうになると、久しく冬に閉ぢこめられてゐた寂しい天地が次第に春らしくなり、野にも村にも長閑かな氣分が漂つて、何となく嬉しさが胸に湧く。今まで暗く

萎縮してゐた心が急に明るく快活になり、前途の希望に輝いて時めく。畑は掘返されて、新しい土を見せてゐる。村はだん／＼と忙しくなり賑かになる。

五月半ばになると、あちらにもこちらにも桑摘む少女の白い手拭が見え、節面白い歌聲が聞える。短冊形の苗代には、四五寸ぐらゐに伸びた苗が、眼も覺めるばかりに青々と美しい。この頃、村の小學校では、毎年の例として、一日授業を休み、全校の生徒が先生に引率され、村内の田を廻つて害虫を驅除する。

六七月頃になると、この山里で景色のよいのを以て誇とされてゐる品井沼の風光がすが／＼しくなつて、誠に眺望

がよい。勇しさうな櫓の音を立てて、菱採りの船が静かな水面を滑つて行く様など、本當に繪にもして見たいぐらゐである。眞夏になると、學校の歸りがけに、男の子はよくここで水泳をする。私達は知合の人の船に乗せて貰つて、廣い沼の眞中邊まで行つたこともある。夕方には、家の裏の大杉に蛹がかしましく鳴く。田舎の夕暮は都會のやうに騒々しくなく、靜かで暢氣である。盆火を焚く頃のしめやかさよ、ゆかしさよ。

九月十月の頃、通學の途すがら、高く澄みきつた紺青色の大空を仰ぐと、花曇に霞みがちな春の空を仰ぐよりも、ずつとしんみりしたよい氣持がする。學校の二階の教室から

は、黄色く實りかゝつた稻田の景色が展望される。晴れた空に赤蜻蛉がすう／＼と飛んでゐるのも見える。冴えた月の夜には、沼の黒い水面に月影が白く映り、折からのそよ風に金波、銀波が閃く。この景色を前にして、叢にすたく蟲の音を聞くと、自然に気分が落着いて来る。月のない夜などは、旅雁の群が啼きつれて、裏の山を過ぎて行くのが聞える。誠にこの山里の秋の夜は晝であり詩である。

十一月頃になると、澁柿も甘く熟れる。よく弟と朝起の競争をして、それを挽いたことがある。稻刈の頃には、方々の田が賑かた、あちからからもこちからからも豊年祝の歌が聞えて来る。

田の面に稻の切株が寂しく残る頃になると、冷たい北風が吹く。沼の水もだん／＼涸れて、船も通らなくなる。この屋敷にも、藁の堆なが幾つも／＼見受けられる。寒月が皎々たる光を水の面に映す夜は、水鳥が夜氣を破つて寒さうに啼く。夜が更けると、山鳩の物凄ものせい啼聲が裏山の奥の方から響いて来ることもある。雪が音もなく降りつゞく日は、四邊がひつそりとして、夕方頃からは、もう外へ出る人もなく、皆家の中に暖い爐を圍んで、楽しい物語に時を移す。北國はかうした冬籠の期間が長い。

仙臺市を北に距ること十里、品井沼のほとりにある我が故郷の四季は、年々こんな風に繰返されるのである。

單調といへば單調であるが、田舎はすべてがのんびりとしてゐる。都會の繁雜な落着かない生活を送るよりも、どれほど平和で安穩なことであらう。私はどこよりもこの田舎の故郷が好きである。(キク子)

一五 武藏野の富士

田山花袋

ニコライの塔
大正大震災の
時まで東京
市神田區駿河
臺にあった基
督教會堂

武藏野の背景は富士で塗られて居る。繪にもさうした種類のもので澤山ある。尾花の末に描かれた富士、落武者の添景として描かれた富士、近頃になつては、ニコライの高塔や瓦斯タンクや十二階などが、其の前景として描かれて居る。それにつけても往昔の武藏野の様が思ひ出される。

十二階

大正大震災の
時まで淺草
區にあつた

世田が谷
東京市の西南
郊

更科日記
菅原孝標の女
が常陸國から
京に上つた時
の紀行

皇居の丘陵に平河天神社があり、日比谷の岸に波が打寄せ、白金臺に沿つて寂しい漁村が連つて横たはつてゐた時分の様が、また世田が谷から來た往昔の奥羽街道が麴町を通つて、半藏門を抜けて、ずつと海岸へと出て行つてゐた頃のこと、乃至は、更科日記にある竹芝の浦時分の寂しい光景が……其の時分にも、旅客は矢張荒涼とした武藏野の末に白く雪に輝く富士を仰いで



大正大震災火災前のニコライの塔高

旅をして行つたのであつた。

富士は今でも東京の帝王である。東京の何處から富
士を取去ることは出来ない。街頭に見える富士の晴雪は、
一日の忙しい勤に疲れた都會の人達の頭に、新しい自由と
慰藉とを與へるばかりではない。富士は實際其處からも
此處からも望まれる、煤煙の暗く渦を卷いて居る中からも、
だら／＼と藁に向つて下りて行く坂の半腹からも、若い人
達の浴衣姿で涼んで居る夕暮の屋敷町からも、モーターボ
ートの往來する川沿の高樓の欄干からも、又は電車の輕快
に走るアスファルトを敷いた街路からも……。「あ、富士が
……」といつて、都會の人達は憧れるやうにして到る處から

それを眺める。駿河臺駿河町富士見町、さうした名稱は、總



太田道灌銅像

べて昔の人達がやはりこの富士に憧れたことを示して居るのである。徳川家康が始めて此處に覇府を開いた時などには、殊に此の富士の晴雪が英雄の心に沁渡つて感じられたに相違ない。太田道灌は之を靜勝軒の軒に仰いだ。

太田道灌
名は持資、江
戸城を築造し
た、文明十八
年(一四八六)歿、
年五十五

蕨驛
埼玉縣浦和町
の南

丹澤山
神奈川縣
多摩山群

秩父山
埼玉縣

中川
東京市の東を
流れて東京灣
に入る

稲毛
千葉市の近傍

多摩の横山
東京府下、多
摩川の沿岸に
ある山

山はみな夜になりゆく大空に

富士が嶺のみぞ暮残りける

或年の冬、私は信越線の蕨驛附近でかう詠んだが、關東平野の處々から見た富士も亦美しかつた。東京の郊外では、大抵箱根・足柄を前景にして居るが、それから西北に進むに従つて、丹澤山塊から多摩山群、次第に秩父山塊を其の前に帯びるやうになつて行つた。中川の河口から見た富士は、東京の百萬蓑を帯びた形に於て勝れ、稲毛の海岸から見た富士は、盤のやうな海と無數の白帆とを持つ様に於て勝れてゐた。多摩の横山の上では、形は小さいが、前に清淺晶玉の一水を帯にし、附近往昔の武藏野の名残の林や草原を持

つて居るのが好かつた。

武藏野の跡を今の東上武藏野兩鐵道線の駛走する附近に探る人達は折々思ひも掛けず、紫紺色に染まつた美しい夕暮の富士を、林の外、垣の縁、または蚊遣火に包まれた一村の上に發見するであらう。黄熟した麥の畑、甘藷の畑、または林に沿うた草原路の上に、遙にそれを發見して、思はず驚喜の聲を發するであらう。(山水小記)

一六 祇園精舎

林 久 男

その日黄昏、船はセイロン島の南角を廻つて、遙か雲際に佛足山の頂を望んだが、その翌くる拂曉に、五百餘間の長堤

東上鐵道
東京市外池袋
から埼玉縣寄
居驛に至る鐵
道、四十六哩
五
武藏野鐵道
東京市外池袋
から埼玉縣飯
能に至る鐵
道、二十七哩
餘

林久男
長野縣の人、
明治十五年生
第三高等學校
教授
セイロン島
印度の南部近
くにある島

コロンボ
セイロン島の
西岸にある港

を繞らしたコロンボの港に入つた。

Colombo

棧橋へ上ると、頭に白布を螺状に巻いた漆黒の印度人が

目に着く。環形の

水牛の櫛を頭に載

せて居る男の多い

印度人の

のも珍しい。

俗風の人のも珍しい。

佛跡で名高いキ

ヤンデー寺は島の

中央にあつて、こ

から七十餘哩隔た

つて居る。汽車も通じて居るが、暑くて穢くて遅いといふ



つて居る。汽車も通じて居るが、暑くて穢くて遅いといふ

ので、我等は五輛の自動車に分乗して、日歸りのドライブを

試みることにした。もう午前九時で、太陽は目の痛いほど

に赫々と照りつけて居る。

名も知らない大木には、爛

れるやうな眞紅の花が咲

亂れて居る。

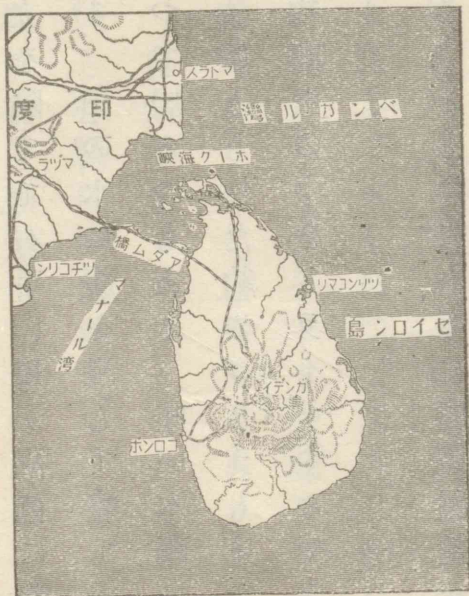
郊外に出ると、草原の中

には牛や水牛が遊んで居

る。やがて兩側は椰子の

林となつて、所々に土人の家が見える。道行く牛車は、椰子

の葉で圓く大きな屋根形に囲まれて居る。労働者は殆ど



太陽の威烈に堪へないやうに、車上に寝轉んだり居睡したりして居る。家の中に居る男女も、多くは犬ころのやうにごろ／＼と寝て居る。木立を隔てて、右手に川が褐色に濁りながらも靜に流れて居る。田の水に腹を浸して寝て居る牛の背には、白鷺の止まつて居るものもある。暗い木蔭には山羊が遊んで居る。圍ひに入られた豹やゴリラゴリラも見える。ちやうど動物園か植物園かの中をドライブするやうな氣がする。

次第に山手に上つて暫くすると、急に右手に廣い展望が開ける。エンジンが熱するので、自動車は時々停車しては水で冷して進む。巨木の蔭の窪地に車を停めて居ると、そ

の邊の土人の子供達が物珍しさうに集つて來て見物する。中には赤兒を抱いた若い女達も居る。耳朶にも小鼻にも穴を明けて、環飾を通して居る。足の指にも輪を嵌めて居る。子供等は學校の歸りと見えて本を持つて居る。側に立つて居る子が頻りに額に指ざして、「金を下さい、金を下さい。」といふ。山奥のこの自然兒までがと、意外でもあり、そのろに淺ましくも思はれた。「自然のまゝで生きてゐてくれ、それを誇に生きてゐてくれ。」と、心竊に叫ばれた。脚下は碌々たる古い鎔岩の谷で、頭上は切立つたやうな絶壁である。汽車はその道を轟然と走つて進む。そこを出ると、直ちに道は大きな岩を穿つた隧道に入る。

いはゆる「豫言の石門」である。キャンデー人はこゝで幾世紀間も敵の侵入を喰止め、この岩を穿つて来るものがこゝを占領する。」といふ豫言を信じて居つたが、果してその豫言は英國人によつて百餘年前に實現されたのであつた。

道は次第に急勾配になり、森は次第に深くなる。椰子や護謨の木立の間には、セイロン茶の畑やその製造場も見える。突然馭者は前方を指さして、エレファント、エレファント。」と大聲に叫ぶ。見ると、大きな象が三匹、土人を乗せて、のそりのそりと歩いて来る。少しく行くと、また數匹並んで来る。材木を鼻に卷付けて運んで居るものもある。

峠を越え、町を過ぎ、植物園の前を過ぎて暫くすると、海拔



マゴン

二千有餘尺の鬱蒼たる谿の中に、碧瑠璃の水を湛へた瓢形の湖水が見える。キャンデー湖である。對岸の陵と家と並木が、激瀧たる湖面に影を投じながら、眞晝の強い日光を一杯に浴びて居る。澄みきつた静寂な感じがひ



バ、イ、ヤ

しひしと身に迫つて来る。

三色の廣い Band バンドを肩から胸

に垂らし、赤輪櫛を載いて居る土

人の老給仕に案内されて、スウィ

ス、ホテルの廣い廊下を昇つて行

Swiss hotel

くと、南國の植物の大きな鉢植が、異香を放ちながら幾百も
並んで居る。パ、イヤ、マンゴーなど、食後の果物も忘れが
たい味である。
Papaya Mango

キャンデーは世々キャンデー族の王都であつたが、十六
世紀の初、ポルトガル人が侵入し、十七世紀の中頃オランダ
人が入込み、最後に、十八世紀の末葉、英國人が古い豫言を實
現してこの地を占領した。
Portugal Holland

湖畔には、水際と山腹に二條の並木道が蜿蜒として居る。
上の道を登りつめると、一眸の下にこの地の全景を俯瞰す
ることが出来る。下の道を行くと、やがて有名なキャンデ
ー寺の門前に入る。いかにも祇園精舎とでもいひたいや

うな感じがする。取繞らしてある古い石壁の彫像は、磨滅
しながらもまづ旅人の眼を射る。水の涸れた濠には、穢い



寺 - デン ヤ キ

龜が澤山群れて居る。
橋を渡つて古い石門
を潜ると、正面に象や
佛像などの彫つてあ
る廣い石の斷片があ
る。その石門の一部
であつたといふ。高

い檳榔樹が蔭をなして居る庭を通り過ぎると、いはゆる審
問室がある。その柱の形は、キャンデー美術の珍しい特徴

を示して居る。こゝは昔諸僧が會して罪人を審問した所であるといふ。中央に罪人を入れる頑丈な檻がある。引返して廻廊を通ると、針の山や虚言者の舌などを現したグロテスクな地獄の壁畫が列んで居る。廊下を潛つて正面に見えるのが、即ち印度幾億人の尊崇してゐる守本尊たる聖齒堂である。長方形の二層樓で、軒に燈籠を吊り、柱は金塗で、諸處の石壁には古い彫像が浮いて見える。正面にはムーン、ストーン、左右には聖像の長い牙が二對据ゑてある。内陣には、燈光が仄にあたりを照して居る。金銀珠玉の六つの小堂に護られて、銀色鈴形の齒龕がある。その中の金の蓮臺に載せてある聖齒は、祭儀の日には金絲に吊

真理
寂靜
寂光土
寂滅土
寂滅土
寂滅土

してさげられるといふ。夾竹桃その他の手向の花の香が、線香の薫に交つて強く鼻を撲つて來る。石階を下つて再び門前に出ると、多くの老いさらばひた土人の乞食が、燬きつけるやうな敷石の上にごろ／＼と寝て居る。幾千年を経たやうな菩提樹の葉がはら／＼と散つて、名も知らぬ怪鳥が枝を渡りながら鳴いて居る。それにしても、太陽の威烈のこの逞しさはどうであらう。草も木も動物も人間も、悉くその前には悩み、喘ぎ、屈服し、弱いもの小さいものは一切滅び、幸に生残つたものが、太陽の^{万能的}威烈を驚嘆し讚美しながら、僅に未來の靜寂光土に淡い憧憬をかけて居るやうである。人間苦の奥底から出

發した釋迦の佛教が、現世を過去現在未來三界の苦境と觀じ、未來に寂光往生の土を求めると至つたのを思ふと、どうしてもこの大自然の威力といふことをも考へないでは居られない。

一七 旅の歌から

與謝野晶子

越の國かゝる幾重の山なみのいづくを裂きてわれ
來りけん

これは、或年の八月に、越後の赤倉温泉に遊んだ時の歌です。幾重ともなしに屏風を立てたやうな山脈が、この國と隣の國を隔ててゐるのを見て、今更のやうに驚いた心持を現したのです。この山脈の厚い壁のどの隙間から、私等は

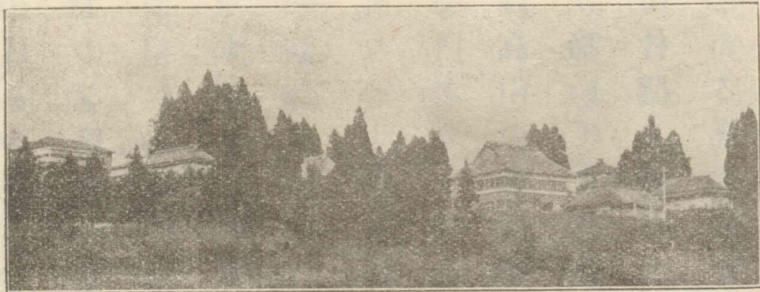
與謝野晶子
與謝野寛の
妻、明治十一
年生、歌人

赤倉温泉
妙高山の東麓

こゝまで出て來られたのだらうと思はれるものの、越後といふ國は山を負ひ海に面してゐることは誰も知つてゐるものですから、旅人としてこの一方に果もない大海を眺めてゐる心細さが解ればいゝと思ひます。

浦島のひらきし箱か煙かと浴槽
をのぞく道のほとりに

赤倉は湧く湯の量が非常に豊富なものですから、到る處の道端にさゝやかな浴槽が設けられてあるのです。浦島が



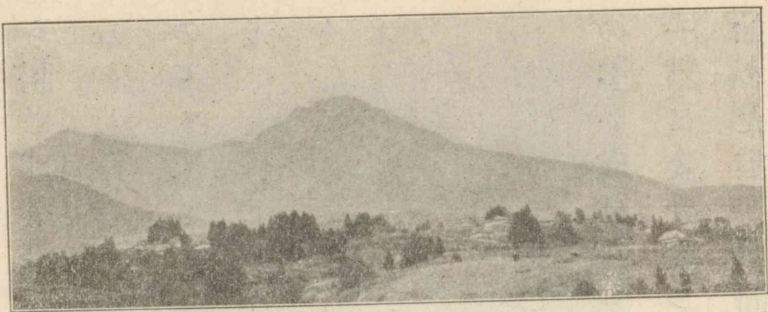
赤 倉 温 泉

妙高山
新潟縣にあ
る、長野縣の
界に近い、海
抜八〇九九尺

開けたといふ玉手箱のやうだと思つたのは、その長手な形
を見た時の感じて、更に湯氣の立つてゐるのを見ると、その
時に箱の中から立つたといふ白い煙だらうかとも冗談を
いつて、大道の中の浴槽を見たといふのです、もとより懐か
しい心持で、浦島太郎を思ふやうな懐かしい心持

ほととぎすわが赤倉に來し日より亂れ心となり
けらしな

夜明も、くわつと山上に日の當る晝も、妙高山の後に日の
落ちる夕も見さかひのないやうに杜鵑が啼いてゐました。
それがいつもかうであるとは、へないで、杜鵑も感じるこ
との敏い自分と同じやうな神経を持つてゐる鳥で、自分の



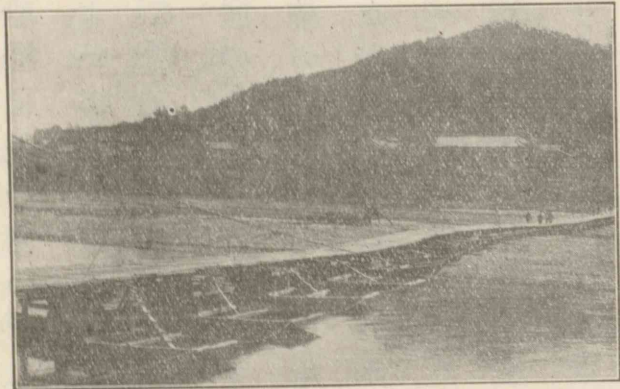
妙高山

こゝへ來たことを知つた日から、あゝい
ふ調子になつたのに違ないといつたの
です。私の感じたところはさうですが、
これによつて、赤倉山にはどんなに澤山
杜鵑が啼いてゐるかを想像していた、
けばいと思ひます。
わが山につゞく空晴れ海の晴れ
飛魚と見ゆ秋の夜の星
わが山にといふのは、自分のある山に
といふ心で、やはり赤倉です。高い處で
見る景色ですから、空は上になくて、上か

ら斜に下へ續いてゐます。そのまた先に海が横たはつて
りました。月夜で山も明るいし、空はもとより、もう一つ先
の海も明るいのですから、海に近い處に幾つもさゝやかな
光を放つてゐる星は、波を離れて二三尺も飛上るあの飛魚
といふ魚のやうに見えるといつたのです。

赤倉や山にひろがる雲を切る鋏をつかふかなく
の蟬

私はこれまでにいろいろな山へ登りましたが、赤倉ほど雲
の多い處はありませんでした。随つて赤倉の景色は一刻
一刻に姿が變つて行きます。例のやうに、午過から廣がり
始めた雲が、十間先の杉木立も見えないほど山を暗くした



千曲川の船橋

時に、涼しい聲のかなかく、蟬が鳴出したのです。私には、そ
れが、早くこれをなくしてしまはないではと、雲といふきし
む絹を一所懸命に切つてゐる鋏の
音だとはよりは考へられなかつたの
でした。

秋風や千曲の川の船橋は掌
ほど中低くして

越後から再び信州に入つて、平穩
村の上林温泉へ行かうとした時、山
國の八月の下旬はもうすつかり初
秋の景色でした。千曲川に懸つた

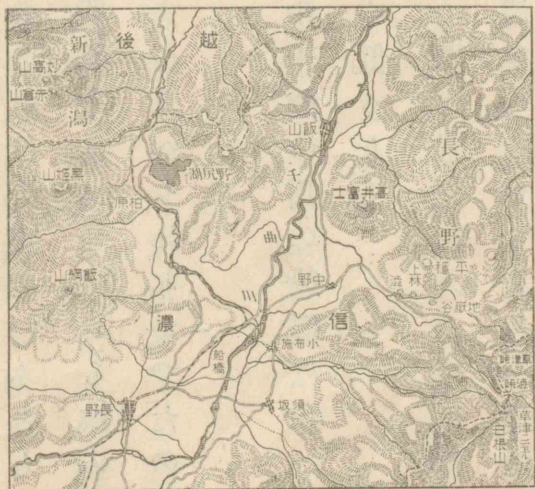
船橋は長いものでした。半ばほどになつて、低い船橋がいよいよ水面に近いやうに思はれ、吹く風が冷たく感じられることも切でした。その船橋の底のやうな感じのする處は、人の掌の窪ほどの、目にも見えぬぐらゐる滑かな傾斜だつたのです。

何故に雲とさかひの入り

まじる山踏むことをなら

ひそめけん

上林温泉の前景としては、第一線に妙高、黒姫、飯綱の遠山が這ひ、近くには澁の峯々が聳え



(後)

てゐます。こゝも朝夕に雲の多く下りる山です。人と人が二三間も離れて立つてゐると、中に雲の垣が出来るのです。雲の中やら山の中やら解らぬかうした奥山を選んで遊ぶ自分は、どういふことが動機で淋しい人になつたのであらうと、こんなことを或夕方私は思つたのでした。

あさましく大雨に追はれ走るなり山を繞れる濁流

とわれ

地獄谷を見に行つた時でした。歸途に烈しい山の雷雨に遭ひました。もとより雨具の用意はしてゐませんでしたが、同行の四人が息せきと杉叢の横の道を走るのでしたが、小路の左に溪の水が流れてゐて、その水勢も先刻に倍

した速さになつてゐて、逃げるやうに行く私達に後れまいと、どんくくと代赭トシロの波が走るのでした。静かな山に静かな心で滞留してゐると思つてゐた旅人の私等は、あさましいあわて方をしました。

みな白き雲の芙蓉を抱くなり溪の上なるおととい

の山

溪の向ふに重なつてゐる山は、どれが姿がよいともどれが勝れて高いとも思はれない兄弟のやうな形に見えるのでしたが、その山と山の間には、皆同じやうに白い雲が溜つてゐる朝の景色を見て、兄弟が同じやうに芙蓉の花を一つづつ抱いてゐるやうだと私は思つたのです。

山涼し馬を雇はん値タマをばもろともに聞く初秋の月宿の女中を呼んで、四人の旅人が澁峠シズノトを草津へ馬で越す相談を縁側でしてゐました。微笑しながら月もこの話を聞いてゐるやうに思はれる山の夜の涼しさを想像していたゞけばよいのです。

山の夜や星にまじりてあるごとく高き方にて鳴けるこほろぎ

八月の夜を明星の湯の山莊ヤマノシラに泊つてゐますと、こほろぎの聲が澤山します。それが山莊より上になつた落葉松の林の中で鳴いてゐるのですから、あの美しい聲の蟲は、あの美しい星と一緒に空にゐて光つてゐるのだといふやうな

氣がしたのです。山の菊かづらのさまに靡くなり頼みあはでは淋しきがため。菊は葛や蔦のやうにかづらになつて伸びる性質のものではありませんけれども、山の岩の鼻から下へ垂れさがつて動いてゐる菊にかづらのやうなひとかたまりのものやうな所があつたのです。これは淋しい山の中であるから、あゝして互に仲よく力になりあはないではゐられないのだらうと私は思つたのです。

横山健堂
名は達三、山

一八 櫻町陣屋

横山健堂

山

口縣の人、明治五平生、文章家
櫻町陣屋
二宮尊徳の舊居、下野國芳賀郡物部村、眞壁の南一里、小田原藩主大久保家の分知、宇津氏の采邑
報徳宗
二宮尊徳の教をいふ
一宮尊徳
通稱金次郎、相模國の人、徳川末期の經濟家、安政三年(二五)歿、年七十
寒僻の下國
下野國を指す

櫻町陣屋は報徳宗の大本山なり。二宮尊徳先生はその生涯の中最も長かりし年數をこの一處に送り、その間に報徳宗を建立せり。即ち先生の人物事業を識らんと欲するものは、その教義の大成が此の如き寒僻の下國に行はれたることを見ずんばあるべからず。陣屋の遺蹟は茅屋一棟蕭然として畑の中にあり。昔の土手も今日は既に半ば除かれて、たゞその一部分を存するのみ。茅屋の斜に後に雜木林に沿ひて報徳神社あり。祠は甚だ荒れて畫趣を呈せり。當年の陣屋は現存茅屋の二倍以上の大いさを有せしなるべしと想はる。尊徳先生の門人數十人も、一時皆この中

に寄宿せしなり。現存の茅屋は僅に先生の居宅を存するのみ、横に長く平かなる極めて平凡なる廢殘の茅屋は、報徳宗の開祖が堅苦力行せし遺蹟なり。客座敷の縁側に近く小池あり、二宮先生の足洗池といふ。先生が薄暮村内の巡視より歸り來り、足をこゝに洗つて座敷に上りしところと言傳ふ。我が輩もまた實にこの縁側より上れり。

客座敷は八疊にして、次室は十疊なり。八疊には床の間もあれど、十疊にはこれなく、戸棚あり。十疊の縁側の柱に、「下野報徳社本部」の看板を掲ぐ。十疊の奥はこの日の雨に雨漏滂沱たり。大いなる盥桶を並べて雨漏を受けつゝあり。尋常人家たらしむとも、雨日此の如き慘澹たる光景、人

この日
作者の行つた
日

雨、落つて
形、汚れて

我が國
親とて

をして酸鼻せしむるものなくんばあらず。而してこの十疊こそ實に二宮尊徳先生の居室たりしなれ。

櫻町に於ける先厩の遺事は、口々語り傳へてなほ多くこの地方に存す。されど先生を見たるもの今殆ど生存せず。即ちこの茅屋に來り、その遺事を聯想し、この舞臺に活躍せしめて瞑想すれば、先生の面目髣髴として見るが如し。

報徳記の著者富田高慶は尊徳先生の女婿なり。富田は夙に尊徳先生の名を慕ひ、江戸より相馬に歸るの途次、來りて謁を求む。先生面會を肯せず、「予は學者を好まず」といふ。日は暮れ、旅館はなし。村役人富田を憐み、その家に延いて宿せしむ。淹留數日の間に、富田の人物先生に聞ゆ。乃ち

富田高慶
磐城國中村藩
士、二宮尊徳
の高弟、明治
二十三年歿、
年七十七
相馬
今の福島縣相
馬郡中村町

孔子教
儒學

使を遣りて面會を求む。

富田は儒者なり。始めて先生に謁するや、鞠躬如として態度甚だ謹めり。先生突如として問うていふ、貴下は豆といふ字を識れりや。と。識れり。と答ふ。乃ち家人を呼んで紙筆を齎さしめ、豆の字を書せしむ。富田謹んで書す。先生更に僕を呼び、既より馬を縁側に牽き來らしめ、箕に豆を盛り、富田の豆の字と並べて馬の鼻端に出す。先生、富田に謂つて曰く、馬はいづれの豆を擇ぶべきか。と。富田一語なし。先生更に問ふ、豆ありて豆の字ありや、豆の字ありて豆ありや。と。

尊徳先生は審に自然を觀察し、理法を自然の中に自得し

人國記

北條時頼の著
といふ

松陰

吉田氏、名に
寅次郎、萩藩
士、幕末の志
士、安政六年
(三十九)歿、年
三十

北條早雲

名は長氏、伊
勢新九郎、永
正十六年(三七
十九)歿、年八十

孫子

支那周代齊の
孫武の撰した
兵法書

たる人なり。自然を研究するものは、人國記の所謂下國に於てするも妨げず。到る處に練思の材料あり。松陰先生が「擧頭觀宇宙、大道到處隨」といへるも、這般の心境に外ならず。富田は多く書を読みたるも、自然を識らず。自然は本にして、書卷は末なり。富田の書卷は先生の自然に屈したるなり。而して先生が豆と馬とを以て富田を開眼せしめたる縁側は、即ち我が輩が靴を脱して上りし縁側なるべし。英雄は吠畝の中より起り、哲人は書卷の間より出でず。北條早雲が孫子の一句に悟り、尊徳先生が田園の中に報徳宗を創建したるも、自得するところは何れも異ならず。たゞ自然と實地との二語にあり。

櫻町陣屋は茅屋蕭索として、宛然南畫の山水の好背景を
 なすべき村家なり。この村家を離れて報徳記を讀めば、尊
 徳先生に書卷の氣あり。この村家に就いて、雨漏の居室に
 當年先生が寤寐にも筆を捨てずして報徳教の案件を起草
 せしを思へば、先生は自然の生める哲人ならずんばあらざ
 るなり。(人物と事業)

中編

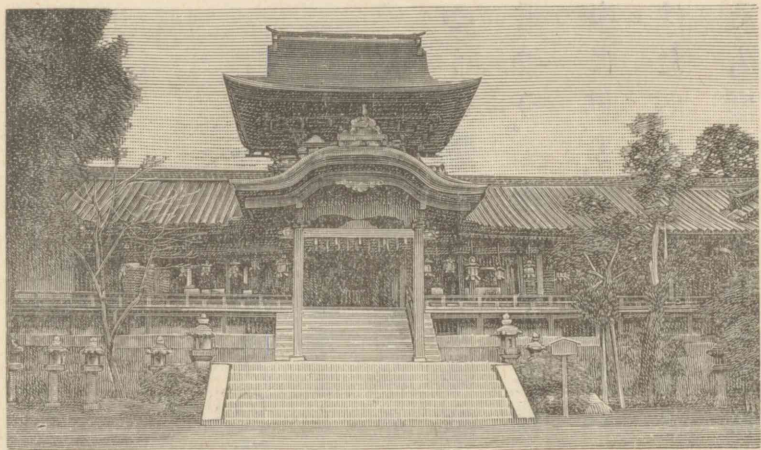
一 仁和寺の法師

吉田兼好

一 石清水まうで

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、
 心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞひとりかちよりまう
 でけり。極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得てかへ
 りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、年ごろ思ひつること
 はたしはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。
 そも参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆ

吉田兼好
 本姓下部、鎌倉末期の文學者、正十五年(二二〇)歿、年六十九
 仁和寺
 山城國葛野郡花園村、光孝天皇の勅願寺
 極樂寺高良神社
 二つとも男山の麓にある



現時の石清水八幡宮

かしかりしかど、神へまゐるこ
そ本意なれと思ひて、山までは
見ず。」とぞいひける。少しのこ
とも先達はあらまほしきこ
となり。

二 鼎かづき

これも仁和寺の法師、童の法
師にならんとする名残とて、お
のおのあそぶことありけるに、
酔ひて興に入るあまり、傍なる
足鼎を取りて頭にかづきたれ

浮田一蕙
京都の人、土
佐派の詩家、
安政六年(三
五)歿、年六十



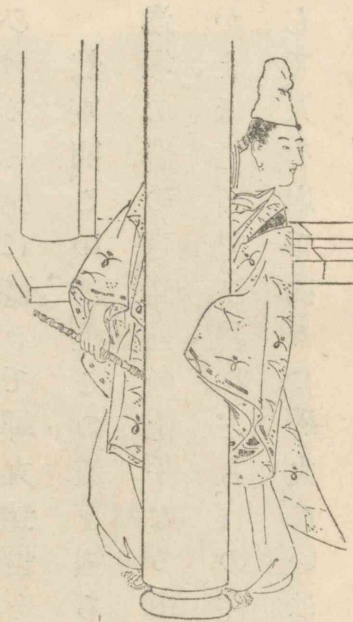
鼎かづき(浮田一蕙筆)

ば、つまるやうにするを、鼻を押平めて顔をさし入れて舞ひ
いでたるに、満座興に入ること限り
なし。暫し奏でて後、抜かんとする
に大方抜かれず。酒宴ことさめて、
「いかゝはせん。」と惑ひけり。とかく
すれば、首のまはり缺けて血垂り、た
だ腫れに腫れて、息もつまりければ、
打割らんとすれど、たやすく割れず。
ひゝきて堪へがたかりければ、かな
はで、すべきやうなくて、三足なる角

しがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限りなし。くすしの許に差入りて向ひゐたりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふもくもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺にかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、あるものいふやう、たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みるたりけり。(徒然草)

博雅の三位

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す



源博雅(菊池容齋筆)

人の子なり。よろづのことに勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に

弾きけり。笛をもえならず吹きけり。此の人、村上の御時に、四位の殿上人にてあはれけり。その時に、逢坂の關に、一人の盲庵を造りて住みけり。名

源博雅

平安朝の人、
天元三年(二齒)
〇歿、年六十

延喜

醍醐天皇

菊池容齋

名は武保、江
戸の人、畫家、
明治十一年
歿、年九十一

逢坂の關
近江國、山城
國の境

をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば、行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやう、など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

世の中は
世の中はとて

世の中はとててもかくても過してん

もかくても同
じこと宮も菓
屋もはてしな
ければ(蟬丸、
新古今集)

宮も菓屋もはてしなければ

と。使歸りて此の由を語りければ、博雅これを聞きて愈、そのみやびの心に感じ、思ふやう、我音樂の道を好むによりて、



(筆雲玉村河) 丸 蟬

この盲に遇はんと思ふ心深し。されど、この盲の命いつまであらんも

計りがたし。我が命も知りがたし。琵琶に流泉啄木といふ曲あり。是は世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞か

逢坂の
逢坂の關の嵐
の烈しきにし
ひてぞあたる

ん」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども、蟬丸
その曲を弾くことなかりければ、其の後三年の間、夜々逢坂
の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や弾くく」と密に立聞
きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日
の夜、月少しうはぐもりて、風少し打吹きたりけるに、博雅、あ
はれ、今宵は興あり。逢坂の盲、今夜こそ流泉、啄木は弾くら
め」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶を搔鳴して、
物哀れに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひ
て聞くほどに、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに
しひてぞあたる世をすごすとて

世を過きんと
て(蟬丸、續
古今集)

とて、琵琶を鳴したるに、博雅これを聞きて、涙を流して哀れ
と思ふこと限りなし。盲獨言に曰く、あはれ興ある夜かな。
若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人
の來よかし、物語せん」といふを、博雅聞きて聲を出して、王城
にある博雅といふ者こそ此に來たれ」といひければ、盲の曰
く、かく申すは誰にかおはする」と。博雅の曰く、我はしかじ
かの人なり。強ちに此の道を好むによりて、此の三年この
庵のあたりに來つるに、幸にこよひ汝に會ふ」と。盲これを
聞きて喜ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、
かたみに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聽かん」と言ふ。
盲、故宮はかくなん彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へし

めてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すぐ喜びて曉に歸りけり。これを思ふにもろくの道はたゞかくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば、末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸賤しきものなりといへども、年頃宮の彈き給へる琵琶を聽きて、きはめたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂にはゐるたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始まれるなりとなん語り傳へたるをや。(今昔物語に據る)

新井白石
名は君美、江

三 我が父母

新井白石

戸の人、徳川
中世の政治
家・學者、享
保十年(三三)
歿、年六十九
父
名は正濟
寅の時
今の午前四時
頃

我物の心を辨へしよりこの方のことは覺えしに、父が日のことたゞ同じさまにして、つゆたがふところおはせざりけり。寅の時ばかりには必ず起出で給ひて、水をもて身を洗ひ滌ぎて、自ら髮取上げ給ひき。夜寒き頃は、母にておはせし人の、我も齡の傾きぬれば、夜寒に堪へずとて、圍爐裏に火を埋みて、それに足さし臥し給ひて、鑊子に湯を入れて、火の邊にさしおいて、父起出で給ふ時に、その湯を參らせられたりき。

二人ともに佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし人の、髮取上げはてては、衣裳改めて佛を禮し給ふこと、曉ごとに怠り給はず。父母の忌日には、手づから飯を炊きてす

三 我が父母

二七

すめられ、下部等に命ぜられしことあらず。夜未だ明けざるほどは、坐してあしたを待ちて、夜明けはてて出仕し給ふ。父のおはせし處は南にありて、出仕し給ふべき門は北にありしに、朝には東よりし、夕には西より道し給ふ。雪踏とて革を底にしたるものを召して、いかにも足音の高らかに聞ゆるやうに過行き給ひしかば、我が父の來り給ふは皆人の聞知りしほどに、幼き子もその啼をとめたりき。

我が物覚えしよりは、髮に黒き筋は少かりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、丈は短くおはせしかど、すべて骨太く逞しく見え給ひたりき。天性喜怒の色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふには、聲高く笑はせ給

ひしことは覺えず。まして人を叱り給ふには、あらくしきことを宣ひしことを聞かず。物宣ふことも、いかにも言葉少くして、たちゐかるくしからず。驚き給ひ、騒ぎ給ひ、事に堪へかね給ひしなどいふことは見しことあらず。たとへば、灸治などし給ふにも、灸小さきと數少きとは無益のことなり。と仰せられて、大きな灸をその數少からず、五所も七所も一時にすゑさせて、痛ませ給ふ氣色も見え給はず。身靜かなる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけ、花瓶には春秋の花を少しく挿みて、それに對して黙坐して日を消し給ひ、また自ら繪かき給ふこともありき。それも色をまうけたる繪などをば好み給はず。

爲新曆之御賀預貴
翰添致拜見候御萬
福御履新之事珍重令
存候拙者事無志迎
歲仕候沙而去冬者御
精選之一册御芳惠不
知所謝前書に纏々
呈謝之事候定而其
書可達九下奉存候
猶期永日萬慶可申
伸候恐惶謹言
新井勘解由君美
正月廿五日
稻若水様
貴報

ぬれば必ずそのために傷めらるゝことあり。何物をも擇
ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、互に相制するところある
にや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰
せられき。

身の病み給ふ時より外は、人を
召して使ひ給ふといふことなく、
何事も皆手づからなし給ひたり
き。朝夕の物を召すことも、飯は
二碗を過ぎず。手して碗をさゝ
ぐるに、その輕重によりて飯の多
き少きは知れぬれば、その餘物は
飯の多少によりて多くも少くも
食ひて、常に我が腹に滿つる分量
を過すべからず。口になふも
のなりとも、一色のみ多く食ひ

新井白石筆蹟

ぬれば必ずそのために傷めらるゝことあり。何物をも擇
ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、互に相制するところある
にや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰
せられき。

世の常には、こなたより參らするものをめして、何物を參
らせよ。」と宣ひしことはあらず。たゞ「四時の新味をば、その
出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人
とともに聞召しけり。

酒は僅かも喉に下し給はば、大きに酔ひ給ひしかば、たゞ
盃を把りて歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめし
けり。身にめしけるものも、家におはする時は、洗ひ濯ぎし

ものをもめしけれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出て給ふに至つては、必ず新しく鮮かなるものをめす。それも身におひ給はぬ品の物用ひられしことはあらず。「むかし人は、常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけてしなり。」など宣ひたりき。「扇子などをも、人多き中に取りも落し遣れもすることあり。これらのものにも、その主の心は推量らるゝことなり。」と仰せられき。

我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集または物語の類など、我が姉妹に讀教へ給ひ、圍碁將碁なども堪能におはして、これらのことをも我に教へ給ひたりき。香爐箱の中に琴の

昔七十戸あると云ふも
ヤリヤリ
ソノ
カキ
クサ
ト云ふも
居

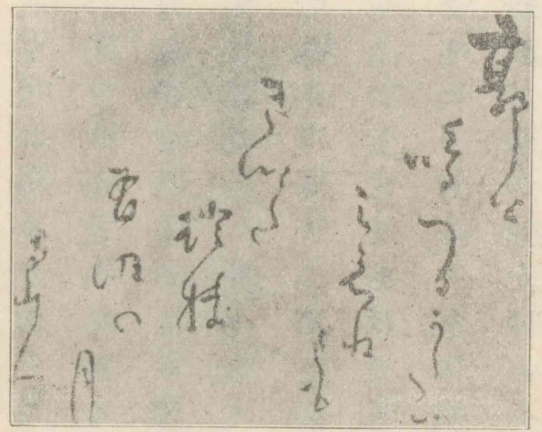
爪を袋にして入れおかれしを見しことあれば、これらのことをも好き給ひしにや。我が見^{物心}まる^がらせしよりは、織縫ふことこそ女の業なれ。」と仰せられて、年毎に美しき筋の布といろくの文ある絹を、みづからも織り、人にも織らせ給ひ、それを父にもめさせ參らせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に残り。賤しきものの言葉に、似たるものの夫婦となるなり。」といふことのあるが、もの宣ひ、爲し行ひ給ふことどもの父にておはせし人にたがふところなくてぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道をいみじく行ひ、六十三にて終り給ひき。

四 狂歌と狂句

四方赤良
本名太田覃、
號は南畝・蜀
山人、江戸の
人、徳川末期
の狂歌師、文
政六年(一八三
五)年七十五
歿、

郭公鳴つる
かたはみえ
れどもきい
た證據は有
明の月
蜀山人

宿屋飯盛
本名石川雅
望、江戸の文
學者、文政十
三年(一八二
九)年七十八
歿、



四方赤良筆蹟

歌よみは下手こそよけれ天地の
動き出してたまるものかは

山吹のはながみばかり金入に
みの一つだになきぞ悲しき
早蕨が握拳をふりあげて
山の横面はるかぜぞ吹く
郭公なきつる跡に呆れたる
後徳大寺のありあけの顔
宿屋飯盛

歌よみはへ
たこそよけ
れ天地のう
ごさいだし
てたまるも
のかは
飯盛

唐衣橘洲
本名小島泰
從、江戸の狂
歌師、享和二
年(一八一三)
歿、年六十

柄井川柳
通稱八右衛
門、名は正通、
江戸の人、川
柳第一世、寛
政二年(一八
二〇)年七十
三歿、



柄井川柳



飯盛筆蹟

菜もなき膳にあはれは知られけり
しぎやき茄子の秋の夕ぐれ

唐衣橘洲

轉寢の顔へ一冊家根に葺き
長つ尻煙管が出たりはいつたり
千客萬來皆來ると困るなり
立聞は今來たやうに内に入り

講釋師見て來たやうな嘘を吐き
 負將棋逃げるたんびにお手は何
 芭蕉は飛込み道風は飛上り
 居候三杯目にはそつと出し
 元日や昨日の鬼が禮に來る

後編

一 皇室中心主義

德富蘇峰

德富蘇峰
 名は猪一郎、
 熊本縣の人、
 文久三年生、
 國民新聞社
 長、貴族院議
 員
 内藤鳴雪
 名は素行、松
 山市の人、俳
 人、大正十五
 年歿、年八十

内藤鳴雪翁の句に、「元日や一系の天子富士の山」といふのがあります。この句は、十七文字の中に、日本の最も誇とすべきものを舉盡してゐると思はれます。實に日本國民として天然について誇るべきものは富士の山であり、人事について誇るべきものは皇室であります。今更何故に富士山は天下のあらゆる山よりも優麗であり崇高であるかといふことを説明する必要がないやうに、我が皇室も何故に世界無二の皇室であるかといふことを説明する必要はありません。私はこゝに月並的に我が皇室の有難みをくどくどしく講釋するつもりはありません。しかし我々は日本國

民と生れて何が第一に有難いかと申すと、それはこの皇室の下に臣民として生活することであり、日本の皇室はどの方面から見ましても、日本第一の寶であり、世界無比の寶であります。これを尊崇しないものは國民たる果報を知らないものであります。フランスに、共和政治は統一し、君主政治は分裂する。といふ諺が France あります。フランスで若し君主政治を行はうとしますと、ブルボン朝の推戴者もあり、オルレアン朝の味方もあり、ナポレオン朝の Napoleon 加擔者もありますばかりでなく、その中にまたそれ々の分派がありますので、どの系統を戴いて君主政體を建立しようとし、しても、その他のものはこれを君主として戴くことを屑しとしませんで、これを顛覆しようと思てますから、君主政治を布くと、早晚必ず内亂が起りますが、共和政治を布きますと、帝政黨でも王政黨でも不服ではありませんが、互に不服と不服の帳消となりまして、とも

かくもそれが支持されます。共和政治は統一し、君主政治は分裂する。といふのは、畢竟この事實に外ならぬのであります。しかるに、日本に於ては、かやうなことは決してありません。元來日本國民は果して同一種族であるか、または混合人種であるか、その混合も二種であるか、三種であるか、そして、混合の割合はどんな程度であるか、それは今こゝに論ずる必要はありません。たゞ日本は歴史上から見ましても、または地理上から見ましても、統一するのに随分骨の折れた國柄であるといふことは争はれません。上古は、東北には蝦夷人の叛亂があり、西南には熊襲人の叛亂があり、また近古は、源平が鬭争し、群雄が割據するなど、どんなに我が國が統一上骨が折れたかといふことが解ります。そればかりでなく、我が國民は昔から獨自一己の氣象が強く、互に衝突し互に唾み合ふやうなことは、その性癖であると申しても、差支がないやうで

あります。しかるに、かやうに歴史の上からも、民族そのものの上からも、頗る統一に困難なものを統一して一國とした力は何に存してゐたのでせうか。それは申すまでもなく、我が萬世一系の皇室に外ならないのであります。

私がこゝに皇室中心主義と申しますのは、別に新しい事實によつて唱へるのでもなければ、また新たな推理によつて説くのでもありません。現在の事實そのものをそのまゝに申しますと、今日の日本は即ち皇室によつて統一されてゐる國家であり、今日の日本國民は即ち皇室を中心として集團となつてゐる國民であります。随つて皇室中心主義は、主義と申すよりも、現在の日本の國情そのものが即ちそれであると申す方が適當であります。

皇室中心主義といふ言葉の意味は、建國以來今日に至るまで、我が大和民族の傳統的精神として維持されて來ましたもので、言葉

を換へて申しますと、皇室が日本固有のものでありますやうに、皇室中心主義もまた日本固有のものであります。これを實際政治に應用する點については、時と處によつて相違はありますけれども、その精神に於ては何等の相違もありません。即ち皇室中心主義は日本國民の傳統的主義であります。今後日本の政界には種種の議論が起りませう。これまでのやうに、世の中が單純でなく、産業制度が徹底的に行はれるやうになりました暁には、資本家と労働者の衝突も漸次面倒を加へるやうになり、また階級的争闘の結果、種々な新思想も出て來ませう。しかし、どんな保守黨にせよ、どんな急進黨にせよ、どんな資本主義者にせよ、どんな労働主義者にせよ、我が皇室に向つては、皆すべての太陽系圈内の遊星が太陽を中心として循環しますやうに、皇室を中心として皇室の下に集ります。これが即ち我が國民の誇であり、また我が國民が最も精

勵な國民として世界に向つて對峙する所以であります。

正直に申しますと、日本は國土としてはさほど有難い國ではありません。我々の祖先は自ら豊葦原瑞穂の國と申しましたが、それでも一度寒暑その宜しきを失ひますと、忽ち食料が缺乏し、外國から果穀の輸入を仰がなければならぬ必要を生じます。我々は非常に恵まれた國民であると思つてゐますが、我が國と太平洋を隔ててゐる米國の國民などは、むしろ上帝の祕藏息子と申してもよいほどに恵まれてゐます。しかし我々は人事に於ては世界中のどの國民よりも恵まれてゐます。それは申すまでもなく、我々が萬世一系の天皇を戴いてゐることでもあります。

今日世界列強が互に角逐するに當つて、何が一番大切であるかと申しますと、第一はその國家の統一であり、第二はその統一した國民の心を一方に集中することにあります。ベルギーの國旗の

Belgium

銘には、ユニオン、イズ、ストロング「強を爲す。」とあります。抑、列國は何によつて國民

Union is strong

の力を合せようとしてゐるのでせうか。米國はすべての天産物を豊富に有してゐますが、その國民は不幸にして歴史を有つてゐません。それゆゑ米國の教育の第一義は、この歴史を有つてゐない國民に、どうして愛國心を扶植するかといふことで、これがため非常に苦心してゐます。その一方法として、特別に愛國心を養成するのに必要な歴史教科書を編纂してゐます。露骨に申しますと、有難くもないことに有難みを加へ、何でもないことに勿體をつけて、ともかく國民の愛國心を養成しようとしてゐます。若し米國に我が國の建國以來のやうな歴史の一頁でも有たせましたなら、彼等はどうなにかこれを利用して、國民の愛國心を鼓舞作興することとせう。しかるに、世界無二の歴史を有する我が國民は、あまりに結構な歴史の中に住んでゐますため、却つてその有難みを

忘れてゐるやうな傾向のありますのは、頗る遺憾に堪へません。今日世界中で最も広い領地を有するのは英國であります。英國はこの広い領地を何によつて統一するかといふことについて、非常な苦心を拂ひ、關稅同盟とか、特惠條約とか、或は帝國會議とか、種々な方法を執つてゐます。しかし、それよりも良い手段として、帝冠の紐を以てすべての領地を結びつけようとしてゐます。皇太子殿下が植民地を御巡遊なさるのもそのためであります。植民地の首相若しくは大臣株を樞密顧問の顯要な位置に拔擢するのもそのためであります。とにかく英國ではあらゆる手段によつて皇室中心主義を實行しようとしてゐます。しかし、悲しいことには、現在の英國の皇室は、手短かに申しますと、我が徳川八代將軍吉宗時代頃から存在する皇室に過ぎません。どんなに古いやうに塗立てましても、新しいものは到底古くはなりません。どんな

に英國の皇室が新しいものであるかといふことは、世界大戰の最中に、從來ドイツ流の姓を名のつてゐられた英皇室が、新にウインズル家と名のられるやうになつたのを見ましても分るではありませんか。若し英國が我が日本のやうな歴史の一部分でも有つてゐますなら、どんなによく英帝國の統一が行はれるか知れませんが。これを思ふと、我が皇室の有難さは、今更私が喋々するのを要せぬ次第であります。

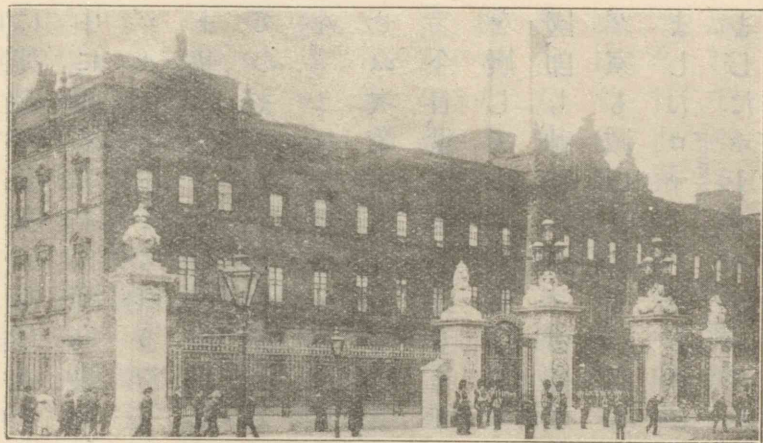
今日、世界を見渡しますと、第一に我が隣國の支那は、愛親覺羅氏を廢して中華民國となりました。歐洲三大帝國中の最も古い帝國、即ち神聖ローマ帝國の相續者といはれてゐましたハプスブルグ家も滅びました。世界で最も広い領地の支配者の一つでありましたロマノフ家も滅びました。富強第一の帝國を支配してゐましたホーヘンツォルレルン家も滅びました。世界を擧げて帝

Romanoff
Hohenzollern

Hapsburg

Deutschland

Windsor



殿宮ムガンキンッパ

國らしい帝國は英國以外にはあり
 ません。Spain、Italy、イタリも立君
 政體の國であります。その基礎は
 今のところ決して堅確であるとは
 申されません。そして英國は立君
 政體を以て最もよく現代の世態人
 情に適合させ、君主政治の美點と平
 民政治の美點を合體して、これを併
 進併行させてゐます。英國の皇室
 は政黨に對しては一視同仁、統一黨
 でも、自由黨でも、はたまた労働黨で
 もその間に何等の差別を立てませ
 ん。労働黨の領袖輩は現に英國皇

帝及びその皇室とは親密な間柄といふことは出来ませんまでも、
 決して疎遠な間柄ではありませんから、Buckingham キンガム宮にも招か
 れ、その園遊會にも晩餐會にも列します。そして、彼等労働黨は資
 本家階級をこそその目ざす敵としてゐますが、皇室に對しては一
 指を加へることさへしません。かやうに、世の中がどんなに極端
 に平民化するとしましても、若しくは社會化するとしましても、英
 國皇室の存立には何等影響がないのであります。元來英國の皇
 室は接穂であります、他國から穂を持つて來て接いだものであり
 ます。その接穂でさへも今日はかやうに立君政治の美を齎して
 ゐます。況や日本の皇室は臺木そのものであります。この皇室
 が一視同仁、國民をすべて我が家族と見て待遇なされますから、國
 民のすべてが皇室を各自の家長として仰ぎますのは勿論のこと
 であります。即ち義は君臣であり情は父子であると申すことは、

岩倉 名は具視
三條 名は實美
木戸 名は孝允
大久保 名は利通
西郷 名は隆盛

決して意味のない言葉ではありません。事實この通りであります。また將來とてもこの通りであると信じます。最後に、皇室がどんなに國民的統一を保つところの力であるかと申すことを、維新の改革史によつて證明させよう。若し皇室なしに維新の改革運動が破裂したとしましたなら、日本はその時少くとも二分三分したでせう。しかるに、皇室を仰いでゐるため、殆ど血を流すやうなことなしに、一大改革を成就しましたのは、實に世界歴史に於ける一驚異であります。歴史家は、維新大改革の功勞を、或は岩倉三條とか、或は木戸大久保西郷とか、その他の個人に歸しますけれども、私は彼等に功勞がないと申しませんが、しかし、維新の大改革を斷行することの出來ましたのは、皇室があるためであつたと考へます。果して然らば、明治の御代も、大正の現代も、皇室の恩澤に負ふことは、到底言葉に述盡すことが出來ないほど

北原白秋 名は隆吉、福岡縣の人、明治十八年生、詩人

であります。この意見は私が感激のあまりに申すのではなくて、むしろ乾燥な歴史的事實を憑據として申すのであります。

二 國民の歌

北原白秋

一 讚めよ 歌へよ 我が大御代を

仰げ 崇めよ 天皇を

おゝ 崇めよ 天皇を

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

二 讚めよ 歌へよ 我が大皇子を

誇れ 喜べ 若き光を

おゝ 喜べ 若き光を

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

三 讃めよ 歌へよ 我が國柄を
承けよ 傳へよ うまし山川

お、 傳へよ うまし山川
彌榮 彌榮 彌榮えあれや

四 讃めよ 歌へよ 我が青空を
統べよ 恵めよ 海の果まで

お、 恵めよ 海の果まで
彌榮 彌榮 彌榮えあれや

五 讃めよ 歌へよ 我が日の本を
奮へ 幸あれ われら國民

お、 幸あれ われら國民
彌榮 彌榮 彌榮えあれや

三 清水

荻原井泉水

荻原井泉水
名は藤吉、東
京市の人、明
治十七年生、
俳人

大島
東京府

岩の窪に湛へられてゐる清水、そこには象牙細工のやうな白い
美しい蟹が遊んでゐたりする。木の根から滲み出る清水、そこに
は草の葉が滴り落ちる雫のために絶えず揺れてゐたりする。清
水は淋しいものである。或時私は大島から三宅島通ひの船に乗
つたが、烈しい西風に吹立てられて、新島の本村にさへも船を寄せ
ることが出来なかつた。小さな舳舟でやつと新島の或濱へ漕付
けた時には漂流者のやうなたよりなさを感じた。齒朶の茂りの
中についてゐる細い徑に、私は船暈のまだ癒えないふら／＼する
身體を運んだ。喉は渴ききつてゐたが、どうすることも出来ない。

辛うじて二里ばかりを歩いた頃、始めて路傍に清水を見出した嬉しさを、なんとも譬へやうがなかつた。そこにはお寺があつた。もう人里も近いと見える。私は全く救はれたやうな気がした。富士の裾野を旅行した時、行つてもく、青い草原にきりく、すが淋しさうに鳴いてゐるばかりで、暑い日がじんく、と照渡るのに、日蔭を作る木立さへない。人にも逢はない、鳥も鳴かない。さうした路に疲れきつた時、ふと旅人に逢つた。「清水のある處はありませんか。」と私がいつた言葉と、「人穴村まで何里ありますか。」と向ふで問ひかけた言葉が同時にぶつかつた。そこらは見渡す限り大平野で、大きな牧場にでもしたらよからうと思はれるが、絶えて水がないために、生き物を飼ふことは出来ないのだつた。清水のない處には生命がない。私達が汗を垂らしながら旅行してゐる時には、生命の泉を尋ねるやうな氣持になりきることがある。

夏の野を旅行したことのある人、または山に登つたことのある人は、清水の味を忘れることは出来まい。暫く時を経てから、その旅のことを思ひ起して見ると、清水のあつた邊のことが一番鮮かな印象に残つてゐるものである。人里を離れてゐる處でも、路傍に清水があると、大抵一軒の人家があるものだ。大きな木を刳つて拵へた槽の縁から、惜しげもなくさらく、と溢れ落ちる水が、不斷に湧いて不斷に流れ去る。時といふものを思はせ、障子を開けてある靜かな家の中には、老婆が一人、糸車をわくく、と廻しながら、毎日々々同じやうな時を繰つてく、倦かないのである。そこを通る旅のものは、軒先の清水を所望しながら、そこに住む淋しい人、何か言葉を交さないではゐられないものである。また深い山中で、勿論人家などはなく、人の通ることも稀であるらしい處でも、ふと見出された路傍の清水に立寄つて見ると、誰か辨當を使つた

らしく米粒がこぼれてゐたり、手ずさびに摘んで來たらしい花が挿してあつたりする。いつかこゝを通つた人が、こゝで休んで行つたのかと思ふと、同じ路を、先へ行くもの、後から行くものの懐かしさも感じられる。

清水は實に幽邃な地境を思はせるものであるが、それでゐて、また不思議に人間生活の親愛を感じさせるものである。昔、西行が吉野山に隠れて柴の庵を結んだ時にも、人里から遠い處を選ぶとともに、そこに清水の湧く處を選ばなければならなかつた。

とくくと落つる岩間の谷清水

汲みほすほどもなき住居かな

と詠んで、彼はこの清水で命を支へてゐた。それから五百年の後、芭蕉がそこに訪ねて行つた時には、西行の庵は朽ちてゐたが、その清水は苔にも隠されずに存してゐた。「かのとくくと」の清水は昔

西行
佐藤義清、鎌倉時代の歌僧、建久元年(元暦)歿、年七十三

に變らずと見えて、今もとくくと雫落ちける。」と、彼は感激の心を述べた。芭蕉は西行の歩んだ人生を慕つて、自分もまたその道を歩かうとしてゐた。その道は、極めて稀な、ほんたうの隠者だけが行く峻しい路である。しかも、先人の足跡は、時の力で湮滅されるものでないといふ眞實を、芭蕉はこの清水の昔に變らず湧いてゐることによつて體驗したのであつた。

下野國蘆野といふ處に、清水流るゝの柳といふのがある。私を持つてゐる昔の旅行案内には、柳の下に水が流れてゐる小さい圖がはいつてゐる。西行がこゝへ來た時、

道の邊の清水流るゝ柳かげ

しばしとてこそ立ちどまりつれ

と詠んだ。芭蕉はその話を聞いて、懐かしく思つてはゐたが、奥の細道の旅の時にそこを通りかゝつて、こゝの郡守戸部某の、この柳

見せばやなど折々にのたまひ聞えたまふを、いつくしのほどにやと思ひしをけふこの柳のかげにこそ立ちよりはべりつれ」と、その喜びを筆にしてゐる。西行も芭蕉も一生を旅に過した人である。彼等は自分の先に行つた人がどんなに行路に苦しみ、そして、どんなにこの清水の蔭で喜びを見出したかといふことを、實によく知つてゐたに違ない。

四 思出の一節

三角錫子

札幌云々
札幌女子小學校訓導として赴任した父
名は風三

二十一歳で女子高等師範學校を卒業した私は、すぐ札幌に赴任したが、それからの五年間は、たゞ單に職務の遂行者であつたといふに過ぎなかつたが明治二十九年六月、旅行中の父の突然の他界は眞に私の覺醒を促した。父は最初私が北海道へ赴任する時、母を伴はせてくれた。随つて弟どもも母と一緒に來てゐた。そし

郡長
靜岡縣に奉職してゐた

長弟
名は茂喜

四人の弟
工學十愛三
工學十謙三
醫學十康正
法學十武雄

て私の義務年限の終るまで、父は一人で暮してゐてくれた。父の方へ歸らうとすれば學校で引止められるので、父に郡長を辭職して北海道へ來て貰ふことにした。その途中、津輕海峽を渡る船中で腦溢血に罹つたのである。その時、傍にゐた者は十七歳の弟だけだつた。五年間の不自由な獨棲を忍んで、愈今日こそ久しぶりに妻子に逢はうといふ楽しい日の朝、不幸にも急死したのだつた。子煩悩だつた父は、子こそ萬金にも換へがたい寶と思つてゐたので、遺産といつては何もなかつた。残つた家族は祖母と母と五人の弟と私とだつた。嫡男であるべき長弟は望のない子だつた。一家の頼みの綱は二十五歳の娘たる私にかゝつた。父の死去を悲しむ涙の眼は、すぐ私の顔に注がれた。十七歳十五歳十歳七歳の四人の弟も、姉ばかり見てゐた。私の眼から落ちる一滴の涙は、家内中の涙を誘つた。私には泣くべき自由さへもなかつた。何

を考へる間もなく、悲みに沈んでゐる私の耳には、子供は必ず大學へ入りたい。」と繰返していつた父の聲だけが鮮に響く。私はなんとも言知れぬ力に満身の緊張を覚え、あらゆる自分の希望を捨てて、生活の道に働いた。しかし、何をいふにも二十五歳の女の腕で、いかに物價の安い時とはいへ、生活の樂なはずはない。力を合せるべき長弟には、骨身を削られるやうなことばかりされた。

次いで私の暗黒時代が始まつた。それは五年間の不幸な結婚生活を送つた涙の時代だつた。たゞ泣くより外はどうすることも出来ない苦しい時代だつた。長弟とは遂に義絶せねばならなくなつた。寄宿舎生活の外には、一日とても別れて住んだことのない母とさへ、一緒に暮すことが出来なくなつた。浮世が厭はしかつた。全く死にたかつた。幾度書置を書いたか知れないが母や弟のことを思ふと死ねなかつた。死ぬ自由を有つてゐる

人が羨しかつた。

かゝる境遇から脱れて、漸く母の許に歸ることが出来て、久しぶりに母子兄弟打揃つた時の嬉しさよ樂しさよ。けれども、長弟の義絶が母に扶助料を受ける資格を失はせたので、生活は益々苦しく、五年の間虐使した身體に一日の休養を與へる暇もなく、すぐまた教職についた。かくて、まあ嬉しやと思つたのはたつた二箇月、五月二十八日の地久節に着るべき私の紋附を縫返したのを最後に、母は病の床に臥した。この時の住居は東京の牛込中里町だつた。この邊は、その頃は、一步足を踏出すと早稲田田圃だつた。毎日眞夜中に病人の汚れ物を持つて、その田圃を流れる小川へ洗濯にいった。空は高く澄んで、北斗七星が鮮に見える時だつた。洗濯を終へると、跣足のまゝ、小川の岸に腰掛けて泣くのが夜毎の仕事の一つだつた。自分の不運を嘆くよりも、幼くてまた一人の親に死

別れねばならない弟達が可愛相だった。高等學校へ入學したばかりの弟の前途も遠かった。どう成行くかと思ふと、出るものはたゞ涙だけだった。皆の眼は父の死んだ時よりも一層私の眼を追廻した。私の一滴の涙は家中を洪水に浸した。私は泣くにも泣けなかつた。自由に泣くことの出来るのは、早稲田田圃の眞夜中より外にはなかつた。私どもの看護も祈念も効がなく、八十歳の老母と四人の男の子とを私に託して、母は遂にこの世を去つた。一家は全く途方に暮れてしまつた。今までは、私は男のやうに働きさへすればよかつた。弟の世話はいふまでもなく、私の着物までも母が縫つてくれた。今からは私は父であり母であり男であり女であらねばならなくなつた。そして、一圓に一斗六升の米は、六升になつた。小學生の弟は中學校に入學した。家賃の安い處へ安い處へと轉々として移らねばならなかつた。恐しい人生

駿河臺
神田區

の旅路に安住の地を得ないぐらゐ悲しいことがあらうか。病氣の弟が病院通ひをする都合のために、駿河臺に引越した時などは、そこに一人の知人もないので、荷車を外に待たせておいて、空家の掃除にかゝり、やつと片付いたかと思つた時には、もう日が暮れて、再び何をする勇氣も出なかつた。お蕎麥で夕飯を濟ませて眠に就いたものの、二疊三疊四疊半の小さい家の内を見渡し、こんな弱い姉を力にもう安らかな夢を結んでゐる弟達の寝顔を眺めて、氷のやうに冷たい堅い胸を抱いて泣明かした夏の夜が思ひ出される。「狐には穴あり、空飛ぶ鳥には巢あり。されど、我には枕する所なし。」といったキリストの歎きに比べれば何でもないとはいへ、その時は身も世もない心地だった。

一人の弟は、高等學校を退學して、徴兵に出て、そのまゝ、軍人にならうか。」といった。も一人の弟は、商店に奉公しようか。」ともいった。

「四人も弟を抱へてゐないで、一人二人は養子にやれ。」と或人に勧められた。また「一人を養子にくれ、ばあとの兄弟の學資は出してやらう。」と熱心に所望する人もあつたが、それも斷つた。たゞ斷念されないのは、弟は残らず大學へ入りたい。」といふことばかりだつた。いける所までいかうと、弟二人に同時に第一高等學校の入學試験を受けさせた。知人が呆れて愛想をつかしたのも無理はない。愈、在學證書を出す時になつて保證人になつてくれてがない。「自分の努力で合格することの出来る入學試験は何でもないが、保證人は自分の力では作ることが出来ない。」と、弟達は泣いた。却つて一家の事情を全く知らない方々が保證人になつて下さつたので、やつと入學することが出来た。

こんな生活も母の存命中は忍ぶのにも張合があつた。母亡き後の我が家の淋しさよ。同胞はたゞ冬の夜の埒の鳥のやうに小

さく固まつて、互に暖め合つてゐた。口にこそ出さね、皆の心を襲つて来る淋しさはどうすることも出来なかつた。それでも、私には、こんな人生流離の巷からでも、旅路とはいへ、父母とともに住んだ數々の思出が美しい繪卷のやうに展開するが、私とともに放浪する四人の弟達には、どんな思出があらう。繰擴げられるどの繪もどの繪も、定めし淋しいく切れくなものだらう。

五 風に吹かれる草

田尻 稻子

田尻稻子
神奈川県
人、明治三十
三年生

私は一本の草であります

私は廣い野に立つて居ります

野の上を絶えず風が渡つて行きます

そして私やあたりの草を縦横に亂して行きます

私は蔭にあつてこの風を受けずに眞直に立つてゐたいと思

ひますけれども

風は意地悪く根元の方まで吹込んで来て
私をじつと立たせておいてくれません

私は風が嫌ひであります

風に吹かれるといふことは死ぬより厭なことだと思ひます
廣い野の中には

風に吹かれて 姿のよいものや

一入しなやかさを増して見よくなるものもあるでせうけれ
ども

私は靜に立つてゐたいと思ひます

どんなに風が吹いても

私だけは動くまいとしますけれども

こんな細い弱い體は

ちよつとした風にもそよぎます

外のものが動くとはやはり私も動きます

自分では動かないつもりでも

いつの間にか身を震はして同じやうに動いてゐます

私は誰かに頼まうと思ひました――

あなたの靜かな庭に移して下さい――

また月のよい夜など

空に向つて訴へようかと思ひましたが

氣の弱いものは

あたりを憚つていへませんでした

私はいつまでここに立つて
いつまで風に吹かれてゐるのでせうか
ほんの一日でも

風といふものが全く止んでくれたらどんなによからうと思
ひます

果から果まで

この廣い野の草が一本も揺れなかつたら
どんなに穩かだよからうと思ひます

日の出る時から月の出るまで
何を思ふゆとりもなく

無駄に過ぎて行く時を見送るの 惜しくてくゞりません

幸田露伴
名は成行、東

六 五重の塔 (浪漫体)

幸田露伴

京市の人、慶
應三年生、文
學博士、文學
者

「五重の塔の願に出ましたは、五重の塔のためでござります。」と、
藪から棒を突出したやうに尻もつたてて、聲の調子も不揃に、辛く
も胸にあることを、額やら腋の下の汗とともに絞り出せば、上人思
はず笑を催され、何か知らねど、老納をば怖いものなぞと思はず、遠
慮を忘れてゆつくりと話をするがよい。庫裡の土間に坐り込
で動かずにゐた様子では、何か深う思ひ詰めて來たことであらう。
さあ、遠慮を捨てて、急かずに、老納をば朋友同様に思つて話すがよ
い。と、飽くまで優しき注意。十兵衛脆くも梟と常々悪口受ける銅
鈴眼にはや涙を浮めて、はい、はい有難うござります。思ひ詰め
て参りました。其の五重の塔を、かういふ野郎でござります、御覽
の通り、のつそり十兵衛と口惜しい綽名を付けられて居る奴でご
ざります。併し、お上人様眞實でござります。仕事は下手で
はござりません。知つて居ります、私は馬鹿でござります、馬鹿に

されて居ります、意氣地のない奴でござります。虚誕うそはなか／＼申しません。お上人様、大工は出來ます。大隅流は子供の時から、後藤立川二つの流儀も合點致して居ります。させて、五重の塔の仕事を私にさせていたゞきたい。それで参りました。川越の源太様が積りをしたとは、五六日前聞きました。それから私は寝ません。お上人様、五重の塔は百年に一度、一生に一度建つものではござりません。恩を受けて居ります源太様の仕事を取りたくは思ひませんが、あゝ賢い人は羨しい。一生一度、百年一度の好い仕事を源太様はされる。死んでも立派に名を残される。あゝ羨しい、羨しい。大工となつて生きて居る甲斐もあられるといふもの。それに引換へ、此の十兵衛は、鑿手斧もつては、源太様にだて誰にだてて萬が一にもおくれを取るやうなことは必ず／＼ないと思へど、年が年中、長屋の羽目板の繕ひやら、馬小屋宿溝の數仕



塔 重 五

事天道様が智慧といふものを私には下さらないゆゑ、仕方がないと諦めても、拙い奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば、建てさせた人が氣の毒なほどのものを拵へたのを見る度毎に、内々自分の不運を泣きますは。お上人様、時々口惜しく、技倆もない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりますは、お上人様。源太様は羨しい、智慧も達者なれば手腕も達者あゝ羨しい仕事をなされるか。私はよ、源太様はよ、情ない此の私はよと、羨しいが、つい高じて、女房にも口きかず、泣きながら寝ました其の夜のこと、「五重の塔を汝作れ、今すぐ作れ。」と、怖しい人に吩咐けられ、狼狽へて飛起きさまに道具箱へ手を突込んだは、半分夢で半分現。眼が全く覺めて見ますれば、指の先を鑿鑿につゝかけて、怪我をしながら道具箱につかまつて、いつの間にか夜具の中から出てゐたつまらなさ。行燈の前につくねんと坐つて、嗚呼情ない詰らないと

思ひました其の心持お上人様解りまするか。え、解りまするか。これだけが誰にでも解つて呉れ、ば塔を建てなくてもよいのです。どうせ馬鹿なのつそり十兵衛は死んでもよいのでござります。腰拔鋸のやうに生きてゐたくもないのです。その夜からといふものは眞實眞實でござりますお上人様晴れて居る空を見ても燈火の届かぬ室の暗い處を見ても、白木造の五重の塔がぬつと突立つて私を見下して居ります。とうとう自分が造りたい氣になつて、とても及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終へるとすぐに夜を籠めて五十分の一の雛形を造り、昨夜で丁度仕上げました。見に来て下されお上人様。頼まれもせぬ仕事は出来、仕たい仕事は出来ない口惜しさ。え、不運ほど情ないものはないと、私が歎けばお上人様「なまじ出来ずば不運も知るまい。」と、女房めが其の雛形をば揺りうごかしての述懐、無理とは聞えぬだけ

に餘計泣きました。お上人様お慈悲に、今度の五重の塔は私に建てさせて下され、拜みます。こゝ此の通り。」と、兩手を合せて、頭を疊に、涙は塵を浮べたり。(五重塔)

七 文學に志した頃

島崎藤村

私が白金の明治學院の學窓にゐた時代のことを思ふと、當時に起つて來た學問と藝術の復活は、かなり目覺しいものであつて、少年期から青年期に移る私は随分種々の刺戟を受けた。

私の文學に志した時代は、それまで埋れてゐた自國の古典が、日本文學全書、日本歌學全書などといふ叢書になつて、毎月のやうに出版された最初の時であつた。徳川時代の文學、殊に元祿時代の文學があちこちの古い塵埃の中から掘出されたのも其の頃で、近松の淨瑠璃集が出版されたり、西鶴の著作が翻刻されたり、芭蕉を

近松 名は門左衛門、戯曲作者
西鶴 井原氏、小説家

島崎藤村 名は春樹、長野縣の人、明治五年生、文學者
白金 東京市芝區

七 文學に志した頃

他の蕉門の諸詩人の書遺したものが漸く注意されるやうになつたりして、さういふクラシックの発見だけでも私達青年の受けた刺戟は少くなかつた。一方には、十八世紀の末から十九世紀の



井原西鶴

初期に互る歐洲の文學が非常に盛な勢で注意されるやうになつた頃でもあつて、私達は殆どそれらの應接に違がなかつたほどだ。今日から見れば、當時の學藝の世界は、言はば處女地とも名付けるべきで、國語には統一もなく、新しい詩歌はまだ形さへ具へず、一切が實に雜然紛然たる有様ではあつたが、併し、其の中を开拓して行かうとする人達の激しい意氣込を考へて見たばかりでも、何となく爽かな感じが起つて來た。

ウォルツウオ

ース

英國の詩人(1770-1850)

パーンス

英國の詩人(1790-1796)

ダンテ

イタリーの詩人(1265-1321)

Handwritten notes in the margin.



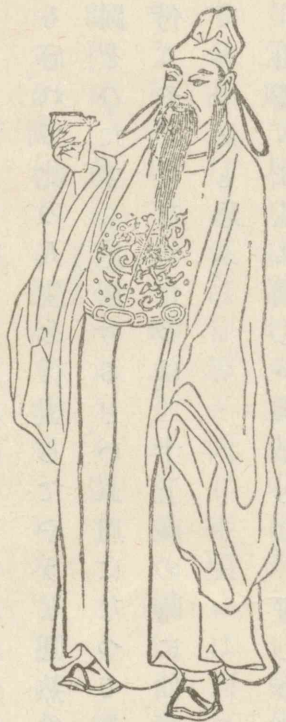
スーオウヅルオウ

私はまだ二十歳に達しないほどの若い年頃ではあつたが、當時明治學院が英語と英文學とを修めるのに便宜の多かつたところから英國の諸詩人の傳記などを讀んだり、時には其の抄譯を試みたりした。私が始めて手にした英國の詩集はウォルツウオースの[Lyrical Ballads](#)であつた。あの湖畔詩人とパーンスなどの詩の世界の相違を想像し始めたのも其の頃で、始めてダンテの神曲の英譯を手にしたのも其の頃であつたと思ふ。其の中に、私は廣い文學の世界に入つて行かうとするのには、奈何にすれば好いかと考へた。それには、私は自分の親しめさうな優れた文學者を選んで、出来るだけその人から入つて行つて見ようといふ方針を取つた。第一、其の人の著作に親

しむこと、第二、その人に關する批評を讀むこと、第三、その人の生涯を知ることに。この三つの方法で、出来るだけ入つて行つて見たら、其の位置から多くの他の文學者を理解することが出来るだらうかと考へた。



私は少年時代から芭蕉が好きであつた。芭蕉の古い全集などを古本で求めて來たのも随分舊いことだ。其の當時の自分は、同郷の先輩の家に身を寄せてゐたほどの境遇ではあつたが、其の乏しさの中から、随分苦心して古い俳書などを集めて來て讀んだ。其の頃、「五元集」とか「風俗文選」とか「俳諧十論」とかを讀んで見た。それは、私の目的がいろ／＼な弟子達を



李白(晩吟堂畫傳)

通しても芭蕉を知らうとすることであつたから、芭蕉に關するものは、どんな人の書いたものでも目を通すのを

楽しみに思つた。あの「奥の細道」や「笈の小文」や「幻住庵の記」などは、少年の昔からどれほど愛讀したか知れない。



杜甫(寺崎廣業筆)

私はまた單に芭蕉が好きだといふだけのことは満足しられないで、芭蕉の求めたものを求めようと志して行くやうになつ

寺崎廣業
秋田縣の人、
日本畫家、東
京美術學校教
授、大正八年
歿、年五十四

李白
唐の詩人
杜甫
同上

た。こんな風にして、次第に西行法師の「山家集」や「選集抄」をも讀むやうになり李白や杜甫の詩集なども愛讀するやうな青年になった。此等から受けた感化は、いつの間にか青年の私を老人臭いものとした。そんな若い年頃に、なか／＼古人の書いたものが十分味へる筈もなかつたが、でも、たゞ何となくあの芭蕉などの心の深いところ引付けられて、どうかしてあゝいふ詩の世界の奥を知りたいと努めた結果、いつの間にか私は自分の年頃をも忘れ、青年として育てて行かなければならない自分自身の芽のあることも忘れて、此の人生を行盡したやうな圓熟の境地にある古人の足跡をひたすら追掛けるといふ風になつてゐた。そこへ私が氣の付くやうになつたのは、二十五歳の時に仙臺の方へ旅した頃からであつたと思ふ。

仙臺へは私は寂しい旅をした。併し、あの仙臺の一年間は、色々

テンペスト
シェークスピアの脚本
ヴァイナス、エンド、アドニス
シェークスピアの叙事詩

な意味で、私には忘れることの出来ない時代であつた。日頃思慕する古人などが、自分等と同じ年頃には、何を思ひ何を書いて居るやうな青年であつたらうか、そこへ氣付くやうになつたのもあの時代だ。私は「テンペスト」を閉ぢて、もう一度「ヴァイナス、エンド、アドニス」を開かうと思ひ立つやうになつた。あの旅に行つて、漸く私を青年らしい自分に返すことが出来た。そして私の「若菜集」の中にあるやうな詩が、其の自分の胸から自由に流れて出て來るやうになつた。(飯倉だより)

原田琴子

原田實の妻、
千葉縣の人、
明治二十五年
生、文學者

八 舊友に送る

原田琴子

秋ちやん。どれほどの長い月日をあなたと逢はないこととせう。十年、いゝえ、十五年にもなるでせう。そして、二人の間の消息は、いつの間にか、ほんの暑さ寒さの時候伺だけに過ぎない

江戸川
東京市小石川
區牛込區の間
を流れる川

やうになつてしまひましたのね。昔の私達のあの友情は、一日も離れてはゐられなかつたほどのあの親密さは、どこへ消えてしまつたこととせう。江戸川のK女學校時代あの頃の感激に満ちた生活は、消えれば果敢ない花火のやうな光をしか持つてゐなかつたのでせうか。いゝえ、私はさう思ひたくありません。あの時分から見ると、世の中も變りましたのね。私も年を取りました。かす／＼の惱ましいこと、苦しいことを經ても來ました。が、その間にも、私は何につけても、あの頃のあなたの魂と結びついてゐた、純な、若々しい、希望に燃え、闘に堪へようとして勇んでゐた私の魂を、いとほしまないではゐられませんでした。あなたもきつとさうでしたとせうと信じます。

今年も爽かな秋が近づいて來ました。私の住んでゐる郊外に近い町では、夜毎に色々な蟲の鳴聲が聞えます。靜に更けて

行く秋の夜に、小鈴を振るやうなちゝゝといふ蟲の音ほど、私の心を洗ひ清めてくれるものはありません。時には嵐のやうに荒み、時には動かぬ沼の水のやうに濁つてやるすべもなく、重苦しい私の心も、流れ入る涼しい夜風に打たれながら、思はず蟲の音に耳を傾ける時ばかりは、この體に燃えてゐる邪熱が吹拂はれてしまつたやうな心地がします。そして、全く救はれたやうな心地がします。かういふ夜、私は幽かな心の灯をかきたてて、あなたとお話がしたく、あなたの微笑が見たくなつて來ます。

*

*

*

*

*

*

秋ちゃん。本當に世の中は變ります。あの明治天皇崩御の夏、その頃牛込のS女學校の寄宿舎にゐた私は、數人のお友達とともに、二重橋前の熱誠溢れる赤子の中に加はつた一人なのですが、そして、黒布に蔽はれた寂しい諒闇の街を、奉悼の涙に咽

びながらさまよつた一人なのでしたが、あの時分と今と比べて見ると、その間にどんなに大きな時世の差が横たはつてゐるこ

とでせう。歐洲大戰この方向となしに感じられる切迫した思、前途の不安、私は今五つにしかならない私の子供のジェネレーションが案じられてなりません。

私は時々思ひます。いつの間に自分ばかり消極的退嬰的になつたのかと。あなたと一緒に暮したK女學校時代のことを回想すると、一層その思を深くします。そして、それは境遇に支配されたせいにか、また



宮城前に於ける市民の天明天皇御平癒祈願

は自分の性質のせいかと考へて見ます。そんなことを考へたところで仕方はないのですけれども。

K女學校にゐた時分から、あなたも私もあんなに社會を論じながら、一方では全く非社會的個人的な性格を持つてゐましたのね。私達は進んで人と交際することの出来ない性分で、いつでも「人は人、自分は自分」といふ態度で、何事もなるべくは知らぬふりをして濟まさうとしましたのね。そして、二人の間だけは親密でしたけれども、先生にもお友達にもあんまり受けがよくはありませんでしたのね。さういふ私の性質は餘儀なくもあなたと別れて別な運命の路を歩まねばなくなつた後、一層深刻になつて行きました。S女學校では、私は孤獨を守り續けました。學校のクラス會、寄宿舎の土曜會は、私にとつて何よりも苦痛に感じられました。梧桐の葉の生茂つた寄宿舎の窓で

書物に親しむ外、私には楽しみはありませんでした。孤獨を楽しむこの私の性癖は、今日までもずっと續いてゐます。あなたと別れて後の私は、いつか對他人對外界の事柄に興味を失つてしまひました。頭では大きな世の中のことを考へながらも、私は自分と性分の合つたものでなければ親しむことが出来なくなりました。褊狹な小さな人間、結局世の中に何事もすることの出来ない憐むべき女、どうかすると私は自分をその一人として考へます。

秋ちやん。平和を欲する心が、絶えず一方には闘の準備を促されるといふのは何といふ餘儀ないことでせう。しかし、自分の力を思ふ時、私は唇を噛んでしつかりと足を踏固めようと思ひます。このすがすがしい秋の良夜、もしも私がたゞ自分一人

去るものは
古詩云、去者
日以疎、來者
日以親(文選)

の幸福——愛する家族と美しい自然と——によつて満足することが出来るなら、今以上に求めるところはありません。けれども、それよりも以上に、私はこの地上に不満を見出さずにはゐられません。そして、爲すべきことを思はずにはゐられません。私達は、お互に強ひて逢はうと思へば、いつでも逢ふことの出来る境遇にありながら、かうして年久しく離れて世に生きてゐるのは何故でせう。「去るものは日々に疎し」といひますが、でも、私は、あなたの裡に生きてゐる私を、私の裡に生きてゐるあなたを、信ぜずにはゐられません。たとひどのやうに久しく別れてゐませうとも。

啼く蟲の音よ。あなたのお庭にも同じやうに啼きしきつてゐることです。 (現代婦人の手紙)

相馬御風

名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、文學者

九 砂上漫筆

相馬御風

私の少年時代に、私達の町に、かはづをぢと綽名された男があつた。可なり暮し向きのいゝ家の次男として生れたのであつたが、生來の魯鈍から、生涯その家の部屋住で通したのであつた。彼は魯鈍ではあつたが、非常に勤勉な働き者であつた。彼は生涯自分の家の作男として忠實に働き續けた。

この「かはづをぢ」には、一生を通じて變らなかつた唯一つの道樂があつた。それは蛙をつかまへて來て遊相手とすることであつた。暇さへあれば、彼は蛙をつかまへて來た。そして、それを庭先の土の上で遊ばせた。就中彼の好きな遊は、蛙の頭へ水を掛けてやることであつた。頭から水を掛けられる度に、蛙は目を閉ぢたり開けたりした。それを見るのが、彼には此の世での何よりの樂みであつた。それを見ると、彼は手を拍つて歡んだ。

或時、「かはづをぢ」は里芋の種をおろすために、俵に一杯詰めた種芋を背負つて山の畑へ行つた。彼が畑の畔に種芋の俵を卸さうとした時、どうしたはずみであつたか、俵の中から芋が一つ轉がつて出て畑の斜面をころ／＼轉がつて行つて、四五間先にあつた肥料溜の中へどぶんと音を立てて落ちた。それをじつと眺めてゐた彼は堪らなく嬉しくなつた。そこで、彼は俵の中から更に一つの芋を取出して前と同じやうに轉がして見た。芋はやはりどぶんと音を立てて肥料溜に落ちた。彼は益面白くなつた。又一つ又一つと、彼は遂に俵の中の種芋が一つもなくなつて了ふまで、その遊を止めなかつた。而も彼は少しも其のことを後悔しなかつた。家に歸つて、ありのまま、を家人に告げた。家人も呆れ果てて、叱つて見やうもなかつた。

「かはづをぢ」は併しながら前にも述べたやうに、家の爲には最も

大切な働き手であつた。生涯を通じて彼の忠實な労働は、どれほど家の爲になつたか分らなかつた。

私達は今でもよく彼を憶ひ出しては、其の「遊び心」の面白さを思つたり、勤勉の權化ともいつてよいほどの其の生涯の意味を考へたりしてゐる。

「かはづをぢ」のことを思ふと、私は何といふことなしに、良寛和尚の、

世の中にまじらぬとにはあらねども

ひとりあそびぞわれはまされる

といふ歌を聯想する。良寛和尚も能く様々の一人遊を喜んだと語り傳へられて居る。突詰めて考へれば彼の歌も詩も書も總べて彼の所謂一人遊であつたと言つてもよい。こんな逸話がある。

良寛
越後國の偉
僧、天保年中
歿、年六十餘

或時、或村外れの吸道を或人が歩いて來ると、行先に當つて、妙な舉動をして居る良寛和尚の姿が目に入つた。それは托鉢姿の良寛が、立つたり蹲んだり、二三步あるいたり又立戻つたり、頻りに同じことを繰返して居るのであつた。不審に思つて近寄つて見ると、それは二三箇の錢を道の上に落したり拾つたりして居るのであつた。そして、いきなり、良寛様、何して御座る。と其の人が聲を掛けると、和尚はひどく驚いた風で、早速その錢を鐵鉢の中に收めながら、いや、の、わしは世間の人達が錢を拾つたぐらゐ嬉しいこととはないといふから、今それをやつて見て居つたのだ。幸ひ今日は托鉢に出で錢を澤山貰つたので、それを道に落して置いて拾つて見るのぢや。併し、一寸も面白うも嬉しうもない。今度は、と、思つて何度遣直して見ても、やつぱり同じことぢや。と答へたといふことである。

こんなことも、良寛和尚に取つては、やはり一人遊の一つであつたに違ない。餘りに馬鹿げたことのやうではあるが、そんなことを人の見てゐない處で夢中になつて遣つて居ることの出來たのも、要するに彼の「遊び心」のした業である。

良寛は又時々日向ぼつこをしながら、着物から取つた虱を紙の上に乗せて、それを眺めて楽しんでゐたとも語り傳へられて居る。而も彼はそれに飽きると、再び其の多くの虱どもを自分の肌着に立戻らせてやるのが常であつたといふことである。

のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならば

わがふところは武藏野の原

こんな歌の出來たのも、恐らくそんな場合に於てであつただらう。一茶も虱をおもちやにして、時にはそれを石榴の木に乗せながら、石榴の實は人肉の味がするといふから、俺の代りにそれを

一茶
小林氏、信濃國の人、徳川末期の俳人、文政十年(一八二九)歿、年六十五

われうつな
蠅が手をか
く足をする
一茶



小林一茶自畫
小去ることの出來ない何物
茶かがある。一切を投出し
自畫た心はどんなものにも遊
ぶことが出来る。地上に

喰へ。などと、皮肉なことを言つたりしたといふことである。一人遊といふ點では、良寛のそれも一茶のそれと同じであるが、一茶の遣り方には冷かな理智の意地悪さがある。

言ふまでもなく、かうしたことは馬鹿げて居る。馬鹿げては居るが、それには一笑に附し去ることの出來ない何物かがある。一切を投出した心はどんなものにも遊ぶことが出来る。地上に一つの石ころを轉がすことにさへ飽くことを知らぬ子供樂しげな有様を、私達は目のあたり見る。一切を投出した人の一人遊の心は、恐らくさうした幼児の心であらう。芭蕉が自分の冠る盥笠を幾日もくくかゝつて張つた折の心持

も、やはりさうであつたらう。「草扉に一人佗びて、秋風寂しき折々、竹取のたくみに倣ひ、妙觀が刀を藉りて、自ら竹を割り竹を削りて、笠造りの翁となる。心靜かならざれば日を経るに懶く、たくみ拙ければ夜を盡して成らず。且に紙を重ね、夕に干して、又重ね、澁といふものをもて色をさはし、益堅からんことを思ふ。二十日過ぐるほどにこそ稍出で來にけれ。」かう彼自らも書いて居る。

かうしたことにまで獨り自ら遊び得る心は實に貧しさに徹して富んだ心である。この貧しさに徹して富んだ心から、限りのない歡びと樂みとが湧く。この歡びと樂みとを享け得る人々の生活は洵に尊い。

芝居好きの人達は、よくあの幕の開く前にカアンと一つ拍子木の音の鳴響く瞬間の氣分を讚美する。芝居のことには一向不通

な私などにも、其の心持だけは能く分るやうな氣がする。以前随分と繁く見た劇その物の印象は、今では餘程薄らいで了つたが、あの瞬間の何とも言へない統一された氣分の快さは、今でも活き活きと憶ひ出される。

不思議にあの瞬間ばかりはどんな種類の觀客でもしんとする。全くあの瞬間の心には一切が統一されて居るなんといふことなしに全心が一つになつて居る、期待と満足とが一つに融けて居る。それは無であつて一切である、終であつて始である。そして、もどかしさやら想像やらさまざまの思惑に亂されてゐた心が、カアンといふ澄みきつた一つの音によつて、さりと一洗されて、一つに纏まる、一切を融會した無となる、一切を任せた心となる。それでゐて、それは一切を受入れようとする素直な心である、無地の心である。思惑を以て物を待つ心でなくして、一切の思惑を絶して素

澤庵
名は宗彭、但馬國の人、禪宗の高僧、正保二年(1645)歿、年七十三

直に従はうとする心である。芭蕉の謂はゆる「萬物に應ずる心」澤庵和尚の謂はゆる「全身全體に延び廣がりたる心」さういつたやうな心境を、あの瞬間の心持が暗示して居る。それは一切の働を收めて、靜に澄みきつた心である、無有一如の心である。言はばそれは心地均しのやうなものである。



澤庵和尚

或人がひどい怪我をして、醫師の手術を受けた。初の中は氣がいくらか遠くなつてゐたために、さまで痛みを感じなかつたが、時間を経るにつれて痛みが益激しくなつていつた。彼は其の苦痛を醫師に訴へて、どうかしてくれと哀願した。醫者だともう施すだけの術を施したのだから、何ともし

て見やうがなかつた。患者は苦痛を忘れる爲に睡り薬でも與へて貰へないかと頼んだ。併し、それは寧ろ危険なことだといふので斥けられた。患者はこんな苦痛を咏へてまでも生きなければならぬかとまで訴へた。彼はもう逆も其の苦みには堪へさうになかつた。其の時、醫師はいつた。「我慢が出来なかつたら泣きなさい。もうかうなつては泣いて居るより外には仕様がな泣きなさい。遠慮せず泣きなさい。」其の瞬間、患者は不思議と非常に強い力を得たやうに感じた。急に心が安らかになつたやうな氣がした。そして、それにつれて痛みも軽くなつたやうに覺えた。頓て、
此の話を聞いて、私は「成程」と思つた。いかにも其の醫師はうまいことを言つたものである。だが、其の醫師だとして、前から考へてゐてそんなことを言つたのではあるまい。醫師に取つても、其

の場合さうでも言ふより外に仕様がなかつたのであらう、それは彼としても困り抜いた果に出た言葉であつたらう。即ちそれは思惑の一切を絶して投出した心から出た聲なのであらう。慰めでも慰めても慰めきれない、言聞かせても、言聞かせきれない——其の困り抜いた氣持から、何もかも投出す積りで言つてのけたのが其の言葉であつたらう。そして、其の場合にも、彼はさう言つたなら患者はどうなるかなどといふやうな思惑からさへも超越してゐたに違ない。かうして醫師その人も自らの其の言葉によつて救はれたのであらう。

「我慢が出来なかつたら泣いてゐなさい。」といふことは、一寸聞くと不人情なやうではあるが、併し、其の場合に於ては、これ以上温かな同情の籠つた言葉は他になかつたであらう。それは如何に慰めても慰めきれないせつなさの極まつた言葉である。投出した

やうで而も一切を含んで居る言葉である。そして、醫師も其の言葉によつて静けさを得た。患者も其の言葉によつて安らかさを得た。其の瞬間に於ける醫師の心持も患者の心持も、共に聊かの思惑をも持つてゐなかつた。それは幼兒の心のやうに自然その物の心のやうに朗かであつたに違ない。此の話は私に近頃になり晴れやかな氣持を味はせてくれた。

一〇 道

大 西 祝

月ならば指して言はんを 花ならば取りても見んを
月ならぬ月の光と 花ならぬ花の匂は
指して言ひ取りて見るべき ものにあらじ
波やめば音と消ゆれど 風ふけば木の葉と散れど

大西祝
號は操山、岡山縣の人、哲學者、文學博士、京都帝國大學教授、明治三十三年、年三十六

散りゆかぬものこそ見ゆれ 消えゆかぬ音ぞ聞ゆる
波に木の葉に

道の邊の草葉のつゆに まどかにも宿れるものを

尋ねつゝきはめも行かば

飛ぶ鳥の翼なくとも 空かくる雲に乗らでも

天地のひろき心の 知れざらめやも (大西博士全集)

現代女子國語讀本 卷五終

常用漢字及略字 (臨時國語調査會決定)

(一) 常用漢字 (千九百六十二字)

【一】一丁七丈三上下不 世茂並【一】中【一】丸主	【一】冬冷涼准凍凍凝	告周味呼命和咽哀品員	完宗官定宛宜客宜室宮
【二】久乏乘【乙】乙九乞 私乳亂【丁】了事【二】二	【凡】凡【口】凶凸凹出	哲唐唱商問啓善喉喜喪	宰害宴家容宿寄密富寒
云互五井【上】亡交京亭	【刀】刀刃分切刈刊刑列	單嗣嘉器噉噉噉噉【口】	察寡寢實審寫寬寶【寸】
【人】人仁仇今介仕他付	初判別利到制刷券刺刻	囚四回因困固國團圍園	寸寺封射將專尉尊尋對
仙代令以仰仲伴任金伊	則削前副割創劇劊劊	圖團【土】土在地坂均坊	導【小】小少尙【尤】就
伏伐休伯伴伺似但位低	【九】力功加劣助努効勅	坐坑坪垂型垣埋城域執	【尸】尺尼尾尿局居屈屈
住佐何余佛作使來例侍	勇勉勸勤務勝勞募勢勸	培基堀堂堅堤堪報埒塔	屋展層履屬【山】山岡岩
供依侮候便係促俊俗	勳勵勸【勺】勺夕包【二】	塗塚塵境墓塀增墨墮壁	岬岳岸峙峯島峽崇崎崩
保俠信修俸俵俸併倉個	化北【口】匹區【十】十千	壇壓壤【土】土壯膏壽	嶮【川】州巡巢【工】工
倍倒候借倫假俸偏停健	升午半卑卒卓協商博	【夕】夕夕夕夕夕夕夕夕	左巧巨差【己】己【巾】巾
側偶傍傑備催働傳價儂	即卿【一】厄厘厚原【ム】	【大】大天太夫央失奇奉	布帆希帖帝帥師席帳帶
傾僅儂儂儂儂儂儂儂儂儂	去參【又】及友反叔取受	奏契奔奢與奪獎奮【女】	常幅幅幕幣【干】干平年
儒儂儂儂儂儂儂儂儂儂儂	叛【口】口古句叫召可叱	女奴好如妃妊妙妨妹妻	幸幹【么】幻幼幾【一】床
先光免免免免免免免免免	史右司各合吉同名后吏	妾姉始姑姓委姦姪姪姻	序底店府度座庫庭庭庶康
全兩【八】八公六共兵具	吐向君吞吟否舍呈吸吹	姪嫡姪孃【子】子字存孝	廉廊廟廢廣廳【之】延廷
		季孤孫學【一】宅宇守安	建廻【卅】弄弊【弋】式
			【己】弓引弘弟弱張強

彈【彡】形影【影】役
彼往征待後徐徑徒得
從御復循微德徹【心】
心必忍忍志忘忙忠快念
忽怒思急急性怨怪怯恐
恥恨恩恭息悅悔悟患悲
悼情感惜惠惡情惱想愁
愉意愚愛感慈態慕憐憫
憤慨慮慰慶慈憂憐憫憚
憶憾憤懇懇懷懷懇懇
【戈】成我戒威戰戲戴
【戶】戶房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拳拾持指振
捌捕捧拾掃授掌排掘掛
採探控推接提揚換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操擔據擬擗攝【支】支
【支】收改攻放政故效欵

教敏救敗敢散敬敵數數
整【文】文【斗】斗料斜
【斤】斤斤斬新斷【方】方
施旋旋族旗【无】既【日】
日且旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晚晝普景
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆
疊曜【日】曲更書曹替
最會【月】月有朋服朕明
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材村杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔查栢柱柳栗
枝株根根栽桃案桐桑桶
梅條梨梯械葉棋榑棚棟
森棺植楠業極榮構概樂
種樓標樞模樣樹橋機橫
檄檣檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歌歐歐【止】止正
此步武歲歷歸【歹】死攷

殊殉殖殘【支】段殺殺殿
毀【母】母每毒【比】比
【毛】毛毫【氏】氏民【气】
氣【水】水水永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溺滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漚漢
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃
濕濟濫濱瀧灌灣【火】火
灰災炊炎炭烈烏無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱
燃燈燒營燭燭爐【爪】爪
爭爲爵【父】父【片】片版
牌牌【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狽狼猛貓猶猿獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理翠
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畔畜畝略番畫異雷雷
疊【疋】疋疎疏疑【疋】疫
疲疾病症痕痘痛痢療
【火】登發【白】百百的皆
皇【皮】皮【血】血盆益盛
盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看真眼眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碁碎碑
確磁磨礎【示】示社祈祕
祖祝神票祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租稗秩
移稅程種稱稱稻稼稿穀
積穗穩【穴】穴究空穿突

窃窺窗窮【立】立章童端
號【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策箇算管篇
箱節範築篤箇簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絕絞絡給統
絲絹經綠維綱網綴綻綿
緊緒線緋綠編綏緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭線繼纂續【缶】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肋背肝股肥
肩肯育肴肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膽臆臆【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【白】白與興與舉舊【舌】
舌舍【舟】舞【舟】舟航般
舵船舶艇艘艦【艮】良
【色】色【艸】芋芝花芽芳
苑苗若苦荑茂茶草荒荷
莊莖菊菌菜華萩萬落
葉著葬時蒙蒸著蓮蔓蔭
薄薦薪藍藏蕪藤藥蘇
【虫】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻
【血】血衆【行】行術街衝
衝衝【衣】衣表衰袂袋袖
被袴裁裂裏褙補裝裸製
複襃【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳諄誇誌

認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談請諒論諫諭諸諾
謀謁謂謙講謝謔謔證識
譚警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貢
貧貨販賈賈賈貳貴買貨
費買賈賈賈賈賈賈賈賈賈
賞賢賈賈賈賈賈賈賈賈賈
【赤】赤赦【走】走起超
越趣【足】足距跡路踊踏
蹟蹴躍【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輔輝輝輦
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辱農【走】走比迎近
返迫迭述迷追退迭迷逆
透逐途通速造逢連週進
逸遂遇遊運過道達達遙
遞遠遣適遭遲遷選選選選
還邊【邑】那邦邪邸郊郎

郡部郵都鄉【酉】酌配酒
酢酬酷酸醜醜醜【采】釋
【里】里重野量【金】金釜
釘針鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞
銘銳鋒鋼錄錢錦鍋鍛鍊
鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鑑【長】
長【門】門閉開開開開開
閱闕【阜】防防降限陸院
陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
隅隆隊階隔隙際障障障障
險隱【隹】隹雀雀雅雅集雁
雌雙雜離離【雨】雨雪雲
零雷電雷震霜霞霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頁頂項順頤頤頤頤頤
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
願願【風】風【飛】飛颺
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餅館饅【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駝駐騎騰驤
驅駢驗驚驛【骨】骨體體
【高】高【髟】髮【門】關

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉
鯛鯉【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【齒】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
點黨鼓【鼓】鼠【鼠】鼠
鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと (二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし
外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞およ
び助詞はなるべく假名で書くこと (四)外來語は假名で書くこと

(三) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勸勸權權漣漣 欲欲觀觀
沢澤扶扶 訳訳 馱馱 枳枳
変變 恋戀 虫虫 灣灣 莖莖
徑徑 經經 輕輕 併併 摒摒
瓶瓶 餅餅 研研 齋齋 齋齋
濟濟 劑劑 殘殘 淺淺 賤賤
錢錢 勞勞 營營 榮榮 學學
覺覺 拳拳 譽譽 譽譽 斷斷 繼繼
齒齒 齡齡 齡齡 濕濕 頭頭 窓窓
総總 屬屬 囑囑 爲爲 偽偽

帶帶 滯滯 參參 慘慘 兩兩
滿滿 癸癸 廢廢 鼠鼠 獵獵
乱乱 辭辭 辭辭 潛潛 贊贊 走走
徒徒 徒徒 從從 縱縱 惱惱 腦腦
処処 扱扱 担担 担担 胆胆 未未
麥麥 壽壽 壽壽 鏘鏘 数数 楼楼
樂樂 藥藥 說說 讀讀 統統 竜竜
滝滝 隨隨 隨隨 隨隨 鹿鹿 麗麗
聰聰 聰聰 應應 虛虛 戲戲 遲遲
解解 解解 獨獨 觸觸 觸觸 昼昼 攝攝

虫虫 蚕蚕 蠶蠶 仮仮 兎兎 兎兎 刺刺
劬劬 嘗嘗 嘗嘗 國國 團團 團團
團團 壺壺 壹壹 實實 寫寫 寫寫
扣扣 叙叙 叙叙 條條 樣樣 燗燗
氣氣 氣氣 爐爐 爐爐 儀儀 儀儀 獻獻 獻獻 畫畫
苗苗 苗苗 留留 盡盡 禮禮 稱稱 稱稱 糸糸
欠欠 欠欠 聲聲 聲聲 台台 舊舊 舊舊 万万
号号 號號 証証 証証 豐豐 弁弁 辨辨 辨辨 通通
辺辺 邊邊 邊邊 醫醫 鐵鐵 鐵鐵 關關 關關 雙雙
靈靈 靈靈 余余 餘餘 餘餘 餘餘 體體 體體 闕闕

塩鹽 点點 党黨 黨黨 龜龜

現代
本讀語國子女



大正十三年十月廿五日印 刷 大正十三年十月廿八日發 行
大正十四年二月一日訂正再版印刷 大正十四年二月四日訂正再版發行

著 者 八 波 則 吉

發 行 者 株 式 東 京 開 成 館
東 京 市 小 石 川 區 小 日 向 水 道 町 八 十 四 番 地

印 刷 者 大 久 保 秀 次 郎
東 京 府 荏 原 郡 世 田 ヶ 谷 町 字 下 町 五 十 番 地

發 行 所 株 式 東 京 開 成 館
東 京 市 小 石 川 區 小 日 向 水 道 町 八 十 四 番 地
(振替貯金口座) 東京第五參貳貳番

價 定 各 卷 四 金 拾 四 錢
昭 和 二 年 定 價 七 金 拾 五 錢

株式會社東京地活版製所印刷



本 III B

原内天子